

915.6-U957



1200500758642

6

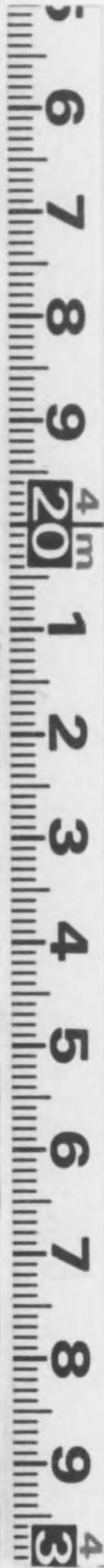
5

俳句の  
旅  
をゆく

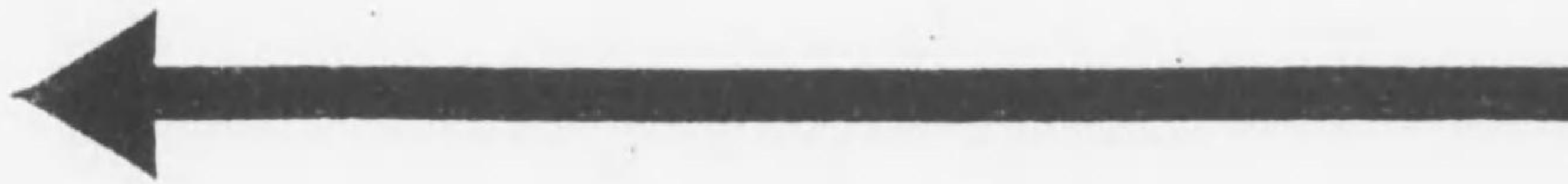
白田  
亞浪

著

北信書房刊



始





915.6-0957



1200500758642

6

5

俳句の  
旅  
をゆく

白田亞浪

著

北信書房刊



915:6  
U95

|   |   |   |
|---|---|---|
| 旅 | 俳 | 白 |
| を | 句 | 田 |
| ゆ | の | し |
| く |   | る |
|   |   | す |
|   |   | 浪 |



北 信  
書 房





1613  
188

### 前記

私の魂をこめた句集は「旅人」であるが、今にして思へば、よくも名づけたものである。昭和三年六月中野の草堂に生活の本據を据ゑて、本籍も故郷の小諸から此處に移し、これが墓場を思ひ定めて以來十四年、其十二月宣戰の大詔が煥發されて、血腥ぐさい白日の悪夢も五年に及んだ今歳の三月、奔湍の如き戦局の急潮に追はれて、またしても旅ならぬ旅の寓居を多摩河畔の丘陵下に營み、祖國の峻しい運命の影を趨ふ旅人となつた。私は何處まで往つても旅人なのである——三澤句抄の始めに書いて置いたが、その旅人としての私が、現實に旅から旅をつづけながらに、ひたすら俳句の道にいそしんだ歩みの跡の記録化されたものが、これら長短の十篇である。他日一本きすべく讀み返し味ひ返して、時に苦く、時に辛く、





時に甘くもあつた夢ならぬ夢のささやきが、今更に私の心を新たにす。  
 さうだ、道は遠い、私は明日も明後日も旅の歩みを続けねばならない。歩  
 みを續けて更に心を新たにせねばならない。それが俳句に頼りてまごころを  
 求むる私の生命的なつこめである。そのつこめを成し了へた臨終の夕べの  
 安らかさを思ふ時、おのづからに私の心はをさる。  
 これが輯成に志した數年前、専ら石楠からの書き抜きをやつてくれた九  
 星や西垣脩の勞を今茲に深謝して置く。

昭和二十年七月二日、三澤の僑居に於て

白、田、亞、浪

俳句の旅をゆく目次

|                  |     |
|------------------|-----|
| 太東岬を前に……………      | 七   |
| 北國を巡り來て……………     | 二〇  |
| 房州の旬日……………       | 五五  |
| 自然と人との恵まれつつ…………… | 六四  |
| 浴泉抄……………         | 一一三 |
| 滿鮮旅上抄……………       | 一四九 |
| 旅は滿支へ……………       | 一六二 |
| 樺太國境まで……………      | 二三八 |
| 歸途の北門……………       | 二五九 |
| 浴泉記去年今年……………     | 二八三 |



俳句の旅をゆく

白田亞浪著

太東岬を前に

登代子は五人の兄妹のたつた一人の姪である。明日は長者町（上總の）へ避暑に行くといふので、何時もはもう寝入りばなであるのに、今宵は頼りにはしやぎ立って寝ようもしない。

それも九時・十時になつては、流石に眼を細うしてグズグズむづかり出した。もう睡くなつたのである。妻が小蒲團に寝かして雑誌の繪嘶しをしてゐるうちに、すやすや小さな鼾をかきながら寝入つて了つた。子供はたわいのないものである。母衣幬を被せてはあるものの、明け放した庭樹から羽虫が灯を慕うて襲來し、翅打つ度にキララを散らす。妻はさそくに立つて電燈のスイッチを捻つたのである。一人の姪を思ふ心の深さに。——大正九年八月三日——



蛾のキララ忌みて見の燈を消しけり

私等に乗せた列車は、大網から西南へ一線に、海に沿うて展けた青田の中を、右へ左へがたびしさせながら、ひたぶるに走つて行く。さつと薄霧を刷いたら海原も見えよう青田の處々に、青螺を浮べた一叢の夏木立。それは外洋の荒浪に甜ぶられた古への島も思はれて、山の見たる私の心の上に、一つ一つ鮮かな影を印したのである。イナサの運ぶ海鳴りは青田風に和して耳を打ち面を拂ふ。——八月四日——

青田中島とも見ゆる森吹かれ

母家裏の大榎より納屋廂を傳ふ大蛇に驚かされた妹の慌しさ。默然と見入る其の樹立は、黒装しめやかに夕雲の幕とほりに低き大空を摩して、まざまざと目に浮ぶ青大将のおそろしき其のすがた。來ての半日は、蛇の騒ぎに今や暮れんとするのである。——八月四日——

夕蟬や關のひろぐる椎が下

土手へ張り出された縁先きの眞下を、北から南へ流るる一條の清流。東岸一帶今か穂孕みし青田を控へて、椎・松・杉・狐枇杷の大木に蔽はれ、早魃に覺まれた水底は張り詰めた青藻に暗く、存分に浸した蘆間の野菊は哀れが深い。折々水馬の重なり打つ水輪を碎いて、群れなす鱒が春波を立てる。泳ぐ蛇、鳴く蛙、紅蟹の足音は雨かとも疑はれて、藻底の深さが知られない。——八月五日——

水馬底藻に深さはかられず

海を離るる夕月を望み見るべく、露光る庭續きの芝草を踏んで堤上を逍遙ふ。缺け初めた月輪は、今し太東の岬脚に流るる夕霽を踏まへて、秒一秒、分一分と岬頭を離れつつある。其の一時の静かさ。緩かなる外洋の濤聲は、夷隅の蘆聲と和して、心頭に爽かなリズムを刻む。五分十分、月は既に額上の松間ひに氷輪を懸けて虫聲織るが如く、涼氣心邊に漲る瞬間、脚下の清流より湧き上がり來る微妙の韻律、それは何ものにも紛れぬ河鹿の鳴く音であつた。——



八月六日——

河鹿澄む出潮の月の赤さはや

舟して夷隅の大江を下る。兩岸一帯を曇む丈餘の青蘆、そして其のうちに湛へられたる満々たる碧水。河口に横ふ長蛇の如き砂丘の彼方より吹き到る潮風は、次ぎ次ぎに高蘆を靡けて、颯々ミ面上を吹き過ぐる。ミ舷側に躍る鱸ミ十文字に、びびミ波上を翔り去る千鳥一羽、又一羽。舵を左轉して蘆洲の盡きんミする所、千鳥群るる沙洲を伸べて、眼前に頭を壓する斷崖は即ち太東の岬である。その岬頭を壓して沖空に湧き立つ峰雲の奇しき其のちからよ。——八月八日——

千鳥鳴く葦津の果ての峰雲かな

轟々ミ鳴る脚下の濤聲に心戦きつつ、太東岬上鳴山のてつべんに立つ。眼をあげた前方の大海岸、海魔の如き雲峰の下に、點々たる帆影は白鳥のそれミも見よう。眼路のかぎり照り霞む

天際に流るる一抹の黒煙は何處へ通ふ汽船にや。眼下の岬頭は大鋸の荒齒の如く刻まれて、間遠に打ち次ぐ大濤の破れて碎けて裂けて散る其の響きは、岩壁の狭間々々に籠つて、山の脊梁にいひ知れぬ底鳴りを傳ふる。ミ見る小松の林間薄交りにまざまざミ白百合の匂ひが高い。

——八月八日——

百合搖ぎ立つて潮鳴り響きけり

母家裏の石祠を包む榎の老木、椎の大樹、松の巨幹の目ざましさ。朝からさしんさしんミ地響きを傳ふるそれは、米搗く杵の音であつたが、風變りの大西風が齧した夕立は一時車軸を流すばかりであるのに、其の沛然たる雨脚を傳うてなほ響き來る杵の音。茂りに茂つて傘かざすあの高槻が、一滴の雨もこぼさぬのであらう。——八月十日——

高槻の雨もこぼさず蟬時雨

旅ミ思へば何ミなく淋しいもの、妹等が、水が不便だの、海水浴場が遠いの、一軒家で淋し



いのご頼りに文句を並べ立てる。さらばご舟を離して、夷隅に浮ぶ。蘆の戦くがままに、鯛の飛ぶがままに、千鳥の鳴くがままに、彼等の不平は底を拂つて水に流された。山國に生を享けた自然の兒たる私等にまつて、珍らかに眼を射たのは、漁夫が舟一杯に鰻の筈を積み入れ、蘆津に沿うて一つ一つ沈めゆくそれであつた。腹切の聲も、蟬りのない心には曠れ曠れしい。

——八月十二日——

### 筈沈めに蘆洲めぐりす行々子

□

妻や義弟がやつて來たのを機會に、舟を浮べて夷隅の新河口に遊ぶ。二・三日來の時化はかりり直つて、風變りの大西風は一しほの暑さを癒す。太東岬の下の大岩近く、引き汐の溜りに、ちらちら泳ぐ三寸・五寸の小鯊が五匹・十四。皆が皆、一心にそれを追ふ心の暢びやかさ。さいつて岬鼻に建て列ねたイシモチの釣櫓を打つ外洋の大濤は耳に高い。——八月十八日

### 汐跡の鯊追ふ時化も直りけり

### 雲峰や風浪あがる釣り櫓

□

母家の主人が川地引をするからこの勸めに、義弟共々蘆間の船場へ往く。五人・十人ご算へて總勢十四・五人、大船を漕いで舊河口の海水浴場のあたりに錨を下ろす。引くがままに囚はれの鯛・鰻・鰻・黒鯛・平目・鯨の數々が太魚籠に滿される。渚を這ふ紅蟹の足音は雨の如く、白砂・鐵砂は眞晝の日に照り合つて、立つ陽炎が眼に眩しい。——八月十九日——

### 蟹の音炎天の砂かぎりへり

□

一同打ち連れて、大原海岸の小濱に遊ぶ。沖波の眞只中へ突き出した、八幡岬の巖骨は、水成岩の白肌を重ねて、頂き一面を蔽ふ青芒は、汐風に息を吐く暇もない。つゞ眼前をかすめて、波上に落つる飛燕の迅さ。沖邊遙かに軸を揃へた釣舟五・六。其の獲物は鱸か否か。晝飯の膳に上された鱸の新味は忘られない。——八月廿一日——

### 飛燕落つ波上に釣るは鱸かや



□  
幼い姪の爲めに、手水鉢に飼はるる金魚の哀れさ。雨あがりの裏川に掬ひ得た小蝦を放てば、囚はれの身を忘れて、それを追ふ生の本能に、一同驚異の眼を呼る。霖雨の跡の梧桐の洩れ日は、庭砂を射て、のうぜんの紅も昏さを誘ふ。——八月廿六日——

□  
小蝦追ふ金魚に霖雨あがりたり

太東の鳴山の尾根に藁を抜いて西日に耀くそれは、東京の講衆にも聞えた飯繩不動尊である。大塚驛長にしるべを乞うて赴き賽す。境内の池の面に這ふ大松は蟠る龍蛇の様も見よう。かてて驚かされたのは丈餘幾幹の大蕨織であつた。乾びた魚鱗其のままの幹を抉つた子蘇磯の幾株は、鉢に移して今や机上に置かれつつある。——八月廿七日——

□  
残炎ややたらに育つ蘇磯の子

太東の御角を傳うて、大鷹壁君を訪ふべく和泉の漁村に向ふ。教鞭を捨てて漁業に投じた其

の奮闘的精神、それは私等海國的民族の運命をして永遠に伸び行かしむる所以の一途である。九十九里の南端、岩角を嚙む大浪を真向に建てられた一株の爐ほこりに鼎座して相語る時餘、座右の小襖に貼られたスケッチは、君が唯一の趣味として大下・丸山の諸畫伯に學んだそれである。波上の帆影にトツカワ起つて渚を逍遙ひつつ待つ事暫し、船聲勇ましく雄叫ぶ荒浪を蹴破つて歸り來る鮑船數艘。落日の葎に鳴き合ふ蟋蟀の聲は寒かつた。——八月廿七日——

□  
鮑船歸る頃なる虫寒さ

□  
明日は歸るこいふ妹等三船場へ急ぐ。太平俱樂部の裏手、徑のほこり畑一面に累々たりし西瓜も、見ればいつしか残り少なに採り去られて、番舎の跡には藁屑が散らばつてゐるばかり。堤下の稻田より吹きあぐる風は涼氣に満ちて、西瓜の枯葉を吹き過ぐる音にも秋を思はせた。無關心に立ち去るべく、私の心の奥に波立つ響きが聽かれたのである。——八月廿八日——

□  
初嵐西瓜番屋の拂はれし



舟は葦津に沿うて河口を指す。颯々煽つた東南風に、それからそれへざわめきを傳ふる蘆の聲々、こ氣がついて瞳を凝らせば、其の大方は穂孕みて、抽き立つ高蘆は一穂一穂に眞晝の日影を散らしてゐる。飛び飛ぶ鯛も妹等には何時ものそれこのみ見られたらう。——八月廿八日——

初嵐穂芦の外に鯛飛んで

暮れ間近かの夕立空、沖邊は立つ峰雲もないに、川上は今沛然と降り注いでゐるらしい。西日は断雲を洩れて、網目なす波上に金彩をひらめかす。こ見る中天より江心へ直下に影を落して水面を打つた鵜一羽、飛び去る一脚には尺餘りの鯛が掴まれてゐたのである。同時に夕立の双翼は右太東の岬より、左八幡岬の一帶を包んで、雨の粒々は礫打ちに面上に注いだ。折柄舟中に在つた素洲君は、自然のかぎりなきちからに魅し去られたものの如く言句もない。——八月廿九日——

鵜水を打つて夕立到りけり

夕立風も収まつた暮方の潮の静かさ。漕ぎ戻る眞上の空に、織るが如く翔り合ふ燕のそれは兩岸の葦津に晴を求むるものこ聞いて、ひたぶるに打ち仰ぐ中空は尙も雲の往き交ひ繁く、一際濃黒き雲の断れ間に不圖見出でた淡々しい半輪の月影。心に満月の宵が待たれたのである。

——八月廿九日——

蘆空に月出でてあり夕燕

巧緻の盆景を擴大したさまの勝浦港！ 私等は米本老十子・森川町長・渡邊實業組合長の諸君に導かれて、遠見岬神社の南崖に立ち、灣の一端を扼する大日影・黒ヶ鼻の波濤を望みつつ吹き到る海風に熱汗を拂はせた。そして渚に西瓜取りの競泳も見、覺翁寺山に、海を抱いて山を疊んだ四方の展望を恣にし、高照寺の境内を覆ふ大銀杏の夥しき乳房にも驚かされたのであるが、最も深い印象を止めたのは、兎角飲用水に乏しい土地柄にて、覺翁寺の茂り合ふ樹影樹影に集ひながら、ひたぶるに大井戸の開かるるを待つそれであつた。清泉の樋口を遡る一ツ時



の蟬聲は如何に涼しからう。——八月三十日——

水を待つ樹下の集るに蟬しぐれ

□  
歸期を控へての最後の舟遊、ミ思へば昔に蜆に、鳴き立つ千鳥に餌齎る鴨に、飛び交ふ鱈に釣糸ひく鯊に、一つミして名残りの哀愁をそそらぬものはない。今日は太東の鎮守の祭にあつて、江場土の渡しはいつもになく往き來が賑ふ。鯊舟も少ないながらに七・八艘は算へられたらう。妻のいふがままに河口近きデルタに舟を寄せて蜆を搔く。落し潮の干潟を踏みつつ搔き溜めた蜆の粒々は、聽てのこみ見検分にも四・五升はあつたらう。それに砂もぐりを搔き出した小蝦も、十五・六は舟底水に這つてゐたらう。近頃のない秋晴れの波上を迂る日影は、きらきらミして眼に暑い。——九月十三日——

蜆搔いて餌蝦も獲つ水の秋

□  
潮の加減か、鯊の釣れやうが弾んで來ない。ミ妻のけたたましい聲に振り返りながら、力任

せにダイダイ釣糸を引寄せて、夢中に舟底へ投入れたそれは、かなり太い鰻であつた。それを最後の獲物ミして舟を回さうミする頭上を押し行く椋鳥の大群、東岸の松原に雨音立てて下り次いだ。間もなくざざミ一度に立つて、上流より押し來る友鳥の大群に合して、折柄時戻りの一羽鴉を引き包んで、眞ん丸に揉み合ふ凄じさ。ミ老船頭が波上を打つた水棹の響きは銃聲ミも聞えて、椋鳥の大群はばつミ二つに分れたまま芦叢めがけて聲を潜めた。夕雲は半天に茜を刷いて、流石に秋のうすら寒い。——九月十三日——

芦たたむ江空を椋鳥の押し來り



## 北國を巡り來て

芭蕉がつぶさに踏み歩いた北國の土！ 未だ見ぬ北國の自然と人は、斯うした點からしても私にまつて多年憧れの一つであつた。金澤の穂浪君を始め彼方此方の同友から頻りに巡遊を勧めて來る。私の頭の中には黒百合で象徴された白山や立山が雲峰を抜いてそそり立ち、錦繪でうろ覚えの兼六園や神通川が次ぎ次ぎに浮びあがる。懐ろ工合や用事の都合で、まつおいつではあつたが、意を決して旅の用意に取りかかつた。けれどあそこからあとから湧いて來る用事に阻まれて、だんだん延び延びになつた上、たうたう用意らしい用意も出來ずに、日程なきは素よりのこゝこ、全く行き當りばつたりの慌しい心を抱いて、八月廿一日（大正九年）の夜の十一時に上野驛へかけつけたのであつた。

それでもこれから増嶋のやうな暑苦しい東京を避けて、涼を北國の山河に趁ふのであると思ふと、悦びの情が胸うちに溢れる。そして最も正しい一路であると思ふ私の俳句觀を北國の

人々に親しく語るこゝこが出来るのであると思ふと、望みの光りに我れ知らず心が躍る。

二十二日（晴） ふこ目が覺めた、汽車は碓氷の隧道にかかつてゐる。夜が明けかかつて眞綿を展べたやうな朝霧が峰へ峰へ静かに這ひあがる。珍らしく頬白が彼方此方で鳴く。爽涼の鬱氣が頬を撫でて流れる。

頬白が鳴く霧晴れの未明かな

郷里に下車して當座の用事を済まし、午後一時、再び北行の列車に乗り次ぐ。なかなか暑い。直江津まではただ焙られるやうな思ひに悩んだ。豫期した涼味も何うやら裏切られさうである。

ほのかに一線を描いて薄雲のやうに浮んだ能登のあたりに沈みゆく夕日を見つめながら糸魚川にかかる。歸省中の虹霓君へ宛てた名刺を驛夫に托す。日の出は山頂がいいと思ひ、落日は海上がいいと思ふ。

富山も高岡も關中現なに過ぎた。津幡に停るこゝ、ゆくりなくも出迎への穂浪君がはいつて來



た。歡喜の情や満足の念がごつちやに湧く。晶石君は據ろ無い用事の爲め昨日臺灣へ立つたごのこも、煙りのやうな淋し味がちらご心頭をかすめる。金澤へ着くご直ぐ砂丘君の顔が見つかつた。窓花・逸山・寥々・容堂君等十餘名ご挨拶を交はして、旅舎藤屋に入る。扇風機の風も暑苦しい。

庭木で蟬が鳴き騒ぐ、そこから機械織りが鳴きはすむ。皆が歸つて了ふご、旅の淋しさが其處此處から湧きあがる。

獨りとなりし夜半の蟲の音淋しまん

二十三日、(晴) 穂浪君ご寥々君に導かれて兼六園へ行く。瓢の池は半ば涸れて楓のかげの

花漢に鶺鴒が尾を振り振り養る。一角の太蘭があらかたおさろに亂れてゐる。

涼しい松かげの苔疊を踏んで噴水を見る。この水が澄んでゐたらばご思ふ。霞の池は一面に照り濁つて、百日紅の落花が敷いたやうに水の面に燃ゆる。

照り濁る水面百日紅燃ゆる

雁行の石橋もあまりに箱庭式だ。照り霞んだ北方に河北潟かほの白く見える。不細工な日本武尊の尊像も、我國での銅像の第一作ご聞けば、立ち戻つて見直された。芭蕉が有数の名吟「あかあかご日はつれなくも秋の風」の句碑がある。今尙俳壇を毒しつつかある梅室の書いたものださうだ。

さうさう梅室ご蒼虬ごは金澤の生れである。北枝や牧童や、そして「ほちほちご草の音きく蚊遣かな」の一句によつて悠久の生命を贏ち得た李東を生んだ金澤の俳壇も、この照り濁つた池水のやうに、彼等二人の爲に全く掻き濁されて了つた。管に金澤の俳壇が掻き濁されたばかりでない、百萬石の加賀様ごいふ大きな力の背景を持った彼等は、暗愚な遊戯三味の俳人ごもの憧憬の的ごなつて、其の毒草は蔓りに蔓り、俳句の國の隅から隅まで鎌の入れ場も無いまでに蔓つて了つた。本當の俳句は彼等の爲に滅ぼされたごいつてもいい。抄くも俳句にごめられた芭蕉の心は彼等によつて氓びて了つた。管に俳句が氓びて了つたばかりではない、彼等に毒された俳人の心は、裡に流るる熾烈の民族精神を喪つて、樂隠居的に安逸化して了つた。私は彼等を呪はずにゐられない。本當の俳句にご目覺めた金澤の俳人がなぜあの句碑をあの儘にして



置くのであらうか。あの慎ましやかな芭蕉の心こしては、寧ろ句碑なきは建てて貰ひたくは無  
いであらう。況して梅室輩に——本當に芭蕉の心を知らない、本當にあの句の値うちも解らな  
い梅室輩に、ああした句碑を建てて貰つたこゝは、久遠に生くる芭蕉の靈の何程不本意に思ふ  
こゝであらうか。

兼六園はまなま私の期待を裏切つて了つた。あの水、設計者の尊い生命までも犠牲にした  
さいふあの池の水はざらざらに照り濁つてゐる。公園としての生命をつなぐ大木はそろそろ枯  
れかけてゐる。私は失望の心を抑へきれなかつた。再び元の前田家の手に移して、天下の名園  
としての本當の價値を保たしめたい。

物産陳列所への途中で窓花君に逢ふ。打ち連れて繞石氏を訪ふ。こつかは玄關へ取り次ぎに  
出られたのが其の繞石氏であつた。ぎつしり詰め込まれた書棚が部屋さいふ部屋に立ちほだか  
つてゐる。ウキスキーを舐りながら何時までも話し合ふ。其の恭謙の態度、温厚の風、子供  
の無いこゝ、釣り好きなこゝ、酒好きなこゝ、漱石以後の英文學者さいふやうなこゝが、心に  
深く刻まれる。人柄なにごやかな夫人の面ざしも親しみが深い。小鉢の石楠も目を惹いた。

宿に歸るこゝ、庭續きの淺々の小川で流し網の人らのさざめきがする。さんざん蚊に喰はれ  
乍ら見てゐるこゝ、夕べの幕が次第にあたりを包む。

二十四日、(半晴) 拵へてもらつた日程により大乘寺へ出かける。靜流君(後の善々)と寥  
々君と容堂君と共に。犀川は思つたよりも小さい淺い川であつた。彼方此方に鮎釣りが見え  
る。練兵場を抜け田甫を通つて寺山にかかる。藩政改革の犠牲になつた本多國老の銅像が目  
つく。劍客の石碑も二・三に止らない。

### 墓ひとつひとつ見てのぼる蟬時雨

大乘寺の荒廢が痛ましく思はれた。代々の住僧が能書でありましたと案内の若僧がいふ。屋  
根替の古瓦を二・三枚記念に貰つて下る。空色が怪しくなつて來た、降らねばいいが。百姓兼  
帯の茶屋で晝食を認めてそろそろ出かける。途中穂浪君の金澤ガアデンに過ぎる。摘みたての  
小粒のトマトの旨かつたこゝを今でも思ふ。そして斯うした暢びやかな生活を羨しく思ふ。  
夕方はまた獨りぼつちになつた、あちこちで梟が鳴き合ふ。



夏鳥鳴き合うて暮れ誘ふなり

夕飯後皆こ連れ立つて、犀川のほぼりの銀水の句會へ行く。句を作つてゐるこ機織りが舞ひ込んで、うしろの床の壁で暫く鳴きはすむ。聞き澄ましてゐるうちに頭の中が冷かになつて来た。會衆は思つたよりも若い人々ばかりであつた。かれこれ三十人もゐたらうか。これ等の人々の上に、金澤俳壇の未來の開展が繋つてゐる。

すいつちよの鳴きすむ今宵無月なり

斯うした自分の句よりも、會衆の句に相當佳作のあつたこを悦ばしく思ふ。ほんの抽象的な概括的な感想を述べて歸る。

いつまでも何時迄も道具立ての興味に釣られてゐてはいけない。輪島の膳・椀や九谷の皿・鉢に、石くれや蚯蚓を盛り並べて誰が箸をつけよう。たゞへ石くれや蚯蚓を盛らないまでも人參や牛蒡ばかりでは腹の蟲が納らない。若しそれにも盛つてなかつなすれば、妙くも中味らしい中味が無かつたすれば、立ちどころに餓えて了ふのは解りきつてゐる。道具を並べ立てたり、事件の敘述をした丈けでは決して詩にならない、俳句にならない。對象こ自分こ

が、しつくり一つに融け合つて、其處に大きないのちの響きが聽かれるまでに純化され、統一されてゐなくてははいけない。輪島の膳・椀や九谷の皿・鉢にはそれ相當の中味を盛ることが肝要だ。その中味は外でもない、作者その人の磨きぬかれた心の相をいふのである。また言葉には其のひみつひみつにいのちがある。言葉をおろそかにすることは、いのちをおろそかにすることである。ここまで突き詰めて行けば、俳句は言葉の藝術だとも云へる。言葉をおろそかにして本當の俳句のあらう筈はない。一から十まで文法語格に據れよといふのではないが、獨り合點の出まかせの宜い加減な文句を並べて、取り澄ますやうな無反省な態度があつてはならない。言葉の興味に釣られるこいふこも、其の一面に於て自分のいのちを忘れたこを意味してゐる。言ひ換へれば他人のいのちを借り物にして、自分は土偶の坊になつて踊らうとするのである。そのやうな無自覺な俳人の心から本當の俳句が生れて來よう筈がない。ここまでも何處迄も自分のいのちをこめ、自分のいのちを悠久に伸び行かじめなくてははいけない。……歸つてからこんな事を思ひつつ寝る。



二十五日、(曇) 河北潟へ出かける。同行は末翁・穂浪・静流・砂丘・寥寥・窓花の諸君とその友の七人。森本で下車して歩く。末翁君はもと末央子といつて、手紙の上での知り合になつてゐる。安宅の關のここから勸進帳のここなご考證的に話されながら静かに歩く。自分も史癖をそそられていろいろ尋ねながら静かに歩く。稻の香がこころよい。大場村の醫者の宅で遅れた者を待ち合はせたり、舟や辨當の用意をして、いよいよ稻舟に乗つて潟まで出る。雨を含んだ浮雲が閉ぢたり開いたりする。降らねばいいなと思ふ。舟のこぼり行くまにまに、兩岸の芦の葉が舟べりを撫でてさやかな音を立てる。搗屋埃りが潟口までも流れて、あちこちの芦間芦間にまひまひがめまぐるしく渦を描く。お盆の聖靈流しの茄子や瓜もほくりほくり浮いてゐる。

まひ／＼や搗屋埃りのこころまで

お聖靈搗屋埃りに流れ浮く

舟は静かに下る芦原花咲いて

窓花

潟の水は一帶に蕩蕩りに青ずんでゐる。それでも足を浸してゐるさ爽涼の感じが脳天まで徹

して来る。履ひ入れた網舟が遙か右手の岸邊で、のろくささ網を打つてゐる。

こ前方、潟の廣々を展げゆくあたり、一かたまりの漁舟が眞黒になつて群めき合つてゐる。

それは巻き網も巻き打ちもいふのである。東道の砂丘君が説明する。二十四・五艘つづつ二た手に分かれて、東西から漕ぎ寄せ、距離をはかつて一齊に網を打ち合ふさまは全く目覺ましいものである。昔の水軍は畢竟斯うした情景に毛の生えたものであらう。巨口も閃き細鱗も躍つた。そして櫓音高く離れては寄せ、寄せては打つこも三・四度、漁舟は次第に遠ざかつて行つた。

巻き網の競り合ふ音の初風に

遙か寶達山の尾根影を水に浸すあたり、紺碧の波上に二・三の白帆を點じて、舞ひめぐるは鵜か鳶か。雲は見る見る大空に翼を伸べて、大粒な雨脚が早くも襲うて來た。

秋日照る砂丘目がけて櫓を押さん 砂丘

慌だしく舟を芦間に漕ぎ入れて雨を避けながら書翰にかかると。あの泥臭い鱈汁も、宿屋の焼き鯛よりも旨かつたこころを思はずにはゐられない。腹が満つる共、芦むらを渡る雨の音も



風の音が耳につく。淋しさが聳き迫つて歸心がきざす。

芦深う夕立つ風の音を聞く

芦深の行々子に舟をつなぎ合ふ

静流

時晴れに漕ぎ出して間もなく、靜流・砂丘・穂浪君等の舟は遠く隔つて、たうたう影を見失つた。雨がまた降つて來た。潟口へ漕ぎ戻つて待ち合はせる間、寥寥君が漸く小鮒を釣りあげて、暫くそれに心を奪はれたのであつたが、歸心は頻りに淋しさをそそつてやまない。戻りは全く淋しい心に閉ぢられた。漸く皆と一緒にになつて森本のブラットホームに立つた時、そして雨雲の閉ぢ互る稻田の夕空を見つめた時、自分はまだ涙ぐむばかりになつて了つた。年甲斐もない私のセンチメンタルを嗤つてくれ。

稻田蔽ふ雲冷ややかに暮れて行く

二十六日 (曇) 一日揮毫。繞石氏も見えられた。疲れたせいとか、腹工合の少し悪いせいとか何もなく氣持が變だ。コロロダインを飲んで暫く心を落ちつける。

夕方また皆が歸つて了ふ。心が靜かになつて行くに従ひ、鼻の聲、蟲の音、池の鯉の跳ねる響きがそれぞれに淋しさをそそる。廁の窓越しに見るこ、前庭の大藤の茂みから夕闇が動く。

蝙蝠の飛び交ふ葉藤黃昏れて

夜、寢込んでからつくづくと思ふ。旅は慌しくそして淋しいものだ。「片雲の風にさそはれて漂泊のおもひやまず」旅から旅に旅寝をつづけた芭蕉もさうであつたらう。縱令、時代は二百年の昔に今に隔りがあるにしても、また私は芭蕉の心を心とすべく希つてゐながらも、全く芭蕉の心になり得ない私の心があるばかりでなく、私の生みづけられた、私の外には何人も體驗し得ない私の境涯があるにしても、また私の旅の心が身が、芭蕉の足の跡を克明に踏んで來たのではないにしても、芭蕉の心の響きを深く感じつつある私にして、芭蕉のやるせない心の相は想つても知れる。彼が金澤の土を踏んだのは「七月中の五日」こいふのであるから、丁度今日は其の二日前に當つてゐる。亡き一笑の墓に手向けた、

塚も動け我泣聲は秋の風

芭蕉

の句は素より、小松への途上に詠んだ、



あかあかと日はつれなくも秋の風

芭蕉

この句にこめられたまこゝし、其の底から滲み出す寂寥無限の心の聲に耳を傾けた時、何人が旅は淋しくないものさひきれよう。また何人かまこゝしの心に還り得ぬものがあらう。芭蕉は全く旅によつて、人としてのまこゝしに徹し、俳句に於てのまこゝしをもこめ得た。芭蕉が俳句作の標語として高唱してゐた「寂びしをり」の「寂び」は、去來が何と云つてゐるようが、誰がなんさいはうが、私のまこゝしとした體驗として、内的な「寂し味」を解したい。「寂し味」を透して味ふまこゝしを解したい。私はこのまこゝしを得べく、もつと心に難行苦行を続けねばならぬ。

二十七日、(雨) 一年中雨と雪とに降りこめられてゐるさひ北國、殊に金澤地方が、今年に限つて今迄にない天氣續きであつたさひふこゝしは、暑さは別として、旅にある自分にこつては、何程仕合せであつたか知れない。けれども今日は朝から降つてゐる。何時も寝てゐるうちから訪れた寥々君も見えない。穗浪君の持つて來て呉れた鶯草を見詰めてゐるさ、淋しさが其

の白い花のめぐりから湧きあがつて來る。雨は今夜も歇みさうにない。

夜、商業會議所樓上の茶話會に行く。雨はしこしこ降つてゐる。蟲の音が雨に織り込まれて静かさを深める。會衆も少い。俳句に就いての雑談を試みて、十時頃宿に引き上げる。

句評をする時、いつでもさう思ふ。自分の經驗からしても、褒められるのは氣持の悪くないものだが、貶されるのは、自分自身其の句の缺點を認めてゐたさしても、決していい氣持のものではない。チェホフが確か「鷗」の中で「褒められた時は嬉しい。くささるれば一日か二日ぐらゐは不愉快だ。」さか何さかいつてゐたさ思ふが、全くその通りだ。けれども悪い句を悪い句と指摘せずに、佳い句ばかりを褒めてゐるさひふ謂はゆるお上手の態度を採つてゐたならば、到底本當に句作の向上は望まれない。批評の鞭を失つた藝術はもう退歩の一方があるばかりだ。佳い句を佳い句とし、悪い句を悪い句とする其處に批評の創作的權威があるのだ。何人も他者の批評に聴くさひふ謙讓の態度、退いて自己を客觀する平靜の態度を失つてはならない。自己客觀の必要なさひは必ずしも句作上に於てのみではない。唯その批評の全部を受け入れるかさうかさひふこゝしは、其の批評が全部正しいかさうかさひふこゝしにある。私等としては



少くも、貶されたとしても不愉快な感情を抑へて反省し精進するだけの心の修練を積まねばならない。いつまでも自分の謳歌者、寧ろ利害を本位とした汚い心の自我に蜜の衣を着せた阿諛者に取り巻かれて、草に埋れた古井の中を泳ぎ廻つてゐるやうでは、迎も藝術の醍醐味は喫せられない。

自分で自分の心に鞭うつ言葉をして、斯んな事を思つても見た。あすは福井へゆくことにしよう。さうして芭蕉が「石山の石より白し秋の風」の句を貽した那谷寺、曾て赤倉温泉に失望した正宗白鳥氏が始めて満足したといふ山中へも往つてみよう。「あかあか日はつれなくも」の名吟は小松への途中で詠まれたものであるが、今のこの邊であつたらうか。

二十八日（晴）けふは金澤に別れるのだ。何もなく心が慌しい。穂浪君の嚴君の七七忌を聞いて一句を捧げる。

#### 照る月も今宵に満つる七七忌

雨も晴れた。朝、立ちかけに尾山神社に賽する。藩公の隠居所であつたこのこゝ、嘗て俠雄

傳を編まうとして、その一人に利家を算へ入れて置いたこゝを思ひ出す。唐様といふが、和蘭風といふか社の門としては餘りに類のない珍しい門だ。停車場へ行つてから、持明院の一莖數花の紅蓮も見た。この蓮も殆んど類のない珍しい蓮だ。この次ぎに來た時には、能登も巡り白山にも登りたいと思ふ。そして金澤は流石に何もなくゆつたりとした所であつたと思ふ。

繞石氏始め見送りの人々、約一週間親しみ交はした人々に別れて福井に向ふ。

石森君は大分肥つて髯むぢやになつてゐた。判事として法廷に立つた時の嚴めしい様子を思つても見る。旅館の花月で無邊先生の扁額や幅物を見出した時は、いひ知れぬ懐しさが胸に湧いた。

ああ、まゝこゝ、まゝこゝ、まゝこゝは人の胸から胸に響く。友としてのまゝこゝ、先輩と後進の心を繋ぐまゝこゝ。石森君が昔を忘れずに心から迎へて呉れた其のまゝこゝも、私が無邊先生の揮毫に心を惹かれた其のまゝこゝも、現はれた形は違つてゐても、押し詰めたまゝこゝは一つである。まゝこゝで心と心が繋がるやうになつて、始めて釋迦の夢みた現世での淨土も實現されよう。キリストの描いた地上の天國も築かれよう。今の政治家、今の教育家、今の宗教家、今の



藝術家、今の俳人、今の商人、さすした人々のすること、いふことを見るにつけても、私はまこと、こころを忘れた現代人の生活を根柢から改めねばならないことを痛感する。

ひまみ休みしてから、新田氏を祀つた藤島神社から峰傳ひに足羽公園へ廻る。福井の市街の半ばを一望に収めた五岳樓に夕餉をしたため、三國節や山中節も聞いて、人事的な北國情調を味ひ、澄み渡る月影を浴びつつ再び足羽山に遊ぶ。今日こそ舊曆の盆の十五日である。若い人々が盆踊りの唄をうたひながら頼りに山を登り降る。私達に連れ立つた若い血汐に燃ゆる女達の濃い淡いさまざまな夢のやうな憧れを想ひ見るに、我知らず年々に老い行く人間としての哀愁が胸一ぱいに湧いて来る。

この土地を踏み臺として演ぜられた繼體天皇の御遺業や、鬼柴田の最期や、越前忠直の末路やがこもこも心に浮んで、古へ古へ引きずられてゆく。一つ時有頂天の豪奢を極めた羽二重成金の、眼前に光り交はす草頭の露にも等しい没落の噂は、私としては寧ろ痛快に聞かれたのである。蟲の音が雨のやうに降りそそぐ。

### 我が爲めの満月ぞ野一面の蟲

### 山風の涼しさ過ぎぬ満つる月

二十九日、(晴) 朝、石森君に導かれて三國行きの汽車に乗る。三國小女郎の昔を想つても見る。港の停車場を下りて、砂道を踏み行く暑さこいつたらない。濱邊に出て打ちよせる海波を見ただけでも胸が展く。發動機船がかしましい響きを立てて東尋坊を巡る。

貝採りの海女が沈んでは浮び、沈んでは浮ぶ。をりをりヒイヒイ微かに千鳥のやうな鳴く音が聞える。如何にも淋しい。「あれは海女が沈んだ時含んだ汐を吹く音で、海女笛も、海女鳴きもいふさうです。」と石森君が説明してくれる。秋開けた日暮れには腸に沁みもしよう。

### 海女笛のをりくに初風の吹く

柱状様の火成岩を束ねた岩壁や岩塊の奇態の稱すべきものが尠くない。昔東尋坊の身を投げたこいふ東尋坊の池は十數丈の絶壁に包まれて裡に深さ幾尋の紺碧を湛へてゐる。涼しいこいふよりは、寒いこいふ方が適切だ。福浦島は水成岩が北海の怒濤に削られたもので、松や雑木



が波に浚はれじこ縋りついてゐる。一體に雄鹿の雄大に豪壯に比ぶべくもないが、自分にこつては海女笛により、いつまでも忘れ難いものゝなつた。發車時間の都合上、望洋樓で晝餉をしたためて歸途に就く。路ばたに干された粟の穂が日に匂ふ。

三十日、(晴) 暮末の偉人、越前藩を一世に重からしめた橋本景岳の墓詣りをして、福井を去る。山中温泉は、福井への汽車中で、附近の成金に荒らされたほこぼりの未だ冷めないこころを聞いて厭になつた。大聖寺や小松で九谷焼きの窯場を見て、行くこころもまたの折にして直路高岡に向ふ。途中、金澤から靜流君と寥々君が乗り合せる。見送りの穂浪・窓花・砂丘・容堂諸君の顔が眼先きに浮んでは消え、浮んでは消える。

高岡の停車場では、強制的に寧ろ機械的に石炭酸水で下車客に手を洗はせてゐた。此處でも形式化された現代生活が厭はしく思はれた。うろ覚えだこころ寥々君に導かれて竹の門君の住居を訪ふ。櫻の馬場の櫻並木が快感をそそる。門前に立ちそそる幾本もの杉の木が、「竹の門」こころいふよりも「杉の門」こころ呼ぶこころの適當さを思はせる。靴を脱いでゐるこころ、行き違ひになつ

た出迎への竹の門・花笠・匂鬼の三君が私等の後影を追うて戻つて來られた。溪仙の額や屏風が眼について羨しく思ふ。

旅館木津樓に導かれて旅装を解く。蓮池を隔てて公園の森を眞向ひに、左方稻田越しに二上山が眸に入る。森に集くつた五位鷺の群が鳴き立つて、涼風が絶え間なく座上を吹きぬく。如何にも氣持が爽かだ。

### 白日の 大空の 深さ五位の聲

夕方導かれて高岡公園を巡る。前田利長が飽迄豊氏の遺孤を擁護すべく築城にかかり、半途徳川氏に阻まれて雄圖を抛つたこころいふ其の跡がそれだ。僅かに人工の施されたばかりで、廣々とした草原や老松の立ちそそる自然の儘の相が、痛く自分の心を惹いた。千疊の松原も、船見山も、中の島もいい。蕨菜の生うる池も、河骨の黄に映ゆる濠も、碧水満々、涼氣が自ら湧いて來る。折から二上の左肩をかすめて、流れ來る夕日が松の老幹を血に染めて、右肩のなだらかに伸びたあたり伏木の炊煙がほのかになびく。心が落ちついたら、これ等の印象を一句一句に具現したい。



せつせし櫻の散り葉を掻き寄せてゐる中を、かさかさ踏み合つて徐かに歩みを移す。夕べの暮りは次第に濃まらつてあたりを包む。

散り葉踏む音次ぎ次ぎに秋の暮

其の夜の句會には、故守水老の後嗣竹湍君も見え、海紅層雲の人々も来る。梅堂・雲歩君等も集ふ。全く偏狭な黨派的感情を超越したまざるにして、心から嬉しく思ふ。

妻と妹と吾子とゐて足る蟲の宵

浪穂白々身に寒き夜ぞ天の川

天の川人去にがてに踊り澄む

静流君と寥々君とは終列車で金澤へ歸る。

また見む夜この月影のかくところ

寥々

更けてひこり庭をさまよふ。澄み切つた月空が露降るやうに冷やかだ。森の鷺らはこそりもしない。

鷺みんな森にしづまり月しづる

夜の静かさと共に、高岡の人々のまごころが犇胸に應へる。所謂黨派的關係よりすれば、これまでその歩みを異にしてゐた多くの人々が、全くさうした非藝術的な障壁を撤して心から私を迎へて呉れたといふことは、兎角餘人を斥け貶す狭い心の俳壇に於て、稀れに見る美しさ、稱へたい。蕪村が、「俳諧に門戸なし、只是俳諧門といふを以て門とす。……諸流を參して、これを一囊中に貯へ、自其能物を撰び、用に隨つて出す。」といつた彼の言葉には推服してゐる私として、それを現實に體驗したことは、私が今度の旅に於て、最も深い印象をこきめたる事である。自分の利害に囚はれて、自分の浅い狭い智恵に累はされて、より深くより深い世界、藝術の天地のあることを知らない俳壇の多くの人々に、何よりの教訓として私はここに特記することゝ禁じ難い。

三十一日 (晴) 朝、庭を見入つてゐるに、鴉がばささ下り立つて、草中や藪蔭を覗き廻り、雀が一つ時聲を潜める。餌に餓えて蛙でも食ふのであらう。竹の門君は月末の決算の爲めさいつて斷りに來、花笠君は向ふ隣りの葬儀のために見えなかつたが、暫くするに句鬼君に續



いて、梅堂・雲歩の兩君も来る。三人に送られて眞晝の日を浴びながら高岡に別れる。

富山の停車場に着く、これも判事の職にある歸虚君の顔が見出された。白芽君にも黙齋君にも始めて逢ふ。二人が二人、若々しい心姿の持主だ。六・七年も逢はないうちに歸虚君はもう三人の親父になつてゐた。相變らず素直な物ごしが私の心に一段の親しみを感じしむる。それにしても旅ははいへ、手土産すら持たずに厄介をかけるのは心苦しいが仕方がない。

餘り廣くもない其の庭には、私の好きな葉鶏頭が植ゑられてゐた。コスモスも挿寄りに伸びて居り、夕顔も朝顔もかなり上手に作られて居た。斯うして自然に愛の瞳を注いでゐる歸虚君は、やつぱり詩を作り歌を解する人であることが肯ける。

私の行くのを待ちに待つてゐた緋郎君は、學校の都合で上京し、水橋の梅の門君は旅に出る、市内の俳人の四・五は、コレラに祟られて引籠る、それこれの爲め今夜のまごるはさだめし人数が少からう、それが私等としても不本意である。白芽君が、如何にも不本意らしく話す。其の言葉を聞いた丈けでも澤山だ。十分に満足する。私にしても日取りの延び延びになつた責めはある。

夕方、はるばる晝青君が令弟の賓水君と共に訪れた。夕飯後そこそこ句會に充てられた俱樂部へ行く。水橋から數人來たけれども、行き違ひになつて空しく引き返した。このこと、逢つて私といふものを知つて欲しかつたが、これも亦仕方がない。兼題の鷓鴣・席題の稻の互選をしてから、句評やら感想やらを述べる。そこへ句瑠璃君があたふたこやつて來た。

「私は炬火時代の句が非常にいいと思ひますが……。乙字さんの、千足袋の日向に氷る寒さかな、いふ句は非常にいい句だと思ひますが……。」句瑠璃君がたづねる。

囚はれてはいけない。そそのかされた感情の囚はれを脱しなくてはいけない。與へられた鑄型に自分自身を打ち込んで、それで満足が出来る。いふのならば兎も角も、また「炬火」時代の句が何處までも好きだ。いふのならば兎も角も、さうでない限り、自分で自分の「個」を無視することは、藝術としての價値の甚だしく損ぜられることを思はねばならない。私は飽迄解放された心のもに、銘々の「個」の現れを尊重したい。「炬火」時代に憧るる人々は、それを手本として進むがいい。また今日の傾向を好しとする人々は、何處までも其の儘の歩みを進めて行くがいい。私には孰れもの心、相の異つた人々を、唯だ一つの鑄型に打ち込まうとする



やうなドグマティックな暴君的態度を執り得ないことを知つてゐて貰ひ度い。そして私はそれが藝術に奉仕するつましやかな心を持つ者の當然探るべき一筋道であるに信じてゐる。乙字居士のあの句も、私は決して悪い句だとは言はない。それに居士としてはあれが行き着くべき道であつたらう。けれども藝術的價值よりすれば、理知的鑑賞を要する點に於て、多少の問題が存するこゝを思はねばならない。いづれにしても、始めから色眼鏡をかけてかかるやうなケチ臭い量見は、さうしつて、ひたぶるにまこゝをもこめやうではないか。

ノートを持たない私の癖にして、こんな句を作つたか忘れて了つた。左の二句だけしか覚えてゐない。

山霧のまきさがりまきのぼる鴉の聲

稲田はろばろ渡り来る夕日頬に燃ゆる

九月一日（半晴）遊船の無いこいふのを、無理にせがんで神通川の鮎漁に出かける。焦れつくやうな磯の砂利を踏み踏み、今が普請の最中である橋梁の下、漁舟のごたごた繋れてゐる

岸邊に立つ。歸虚君の一家と白芽・黙齋の兩君と私との總勢八人であつた。櫓を押して中流のころみに出る。網舟は別に扇様の大きな網を下つ瀬に据ゑて、上つ瀬から鶴の羽を綴つた長繩を浸して鮎らを追ひ下して来るのを待つてゐる。時が過ぎて餘り大きくはないが、掬ひあげた一網に三・四十から銀鱗を閃かして魚籠に收められるさまは、屢次多摩川に鮎狩を試みた経験を持つ私にしても、始めての大漁であり、始めての漁法であつた。

斯くして鮎は魚籠に滿ち、船頭の手によつて色々料られて頼りに私達の口に送られた。このやうに鮎腹の滿ちたこゝは、これも亦始めてのこゝにして、歸虚君や白芽君に深く感謝せねばならない。

雷氣を含んだ雲が晝過ぎる頃から大空に擴がつて、川上の立山あたりはもう眞黒の翼に蔽はれ、川下から對岸の牛の脊のやうな吳羽山へかけて、一帯に雲の帯が伸びるこゝもなく伸びてゆく。輕雷が遠くの祭太鼓を聞くやうに瀬音にも紛れず響く。

千鳥鳴き消ゆ川上よりぞ夕立てり

苦熱はすつかり洗ひ去られて、川風が冷や冷やと頬を撫でる。橋の上手の渡し近き砂丘の人



だかりは、さだめし遊船の馬鹿騒ぎを見てゐるのであらうと思つてゐたら、それは十五になる男の子の溺死であつたさうだ。今それが擔はれて行く。鮎にも飽き、涼にも足りた私の心にはまたしても一道の淋し味が通ふ。

歸つてから夜食の膳にのぼされた夫人の心づくしの鮎の料理も、飽満の腹中、最早それを容るべき餘地もなかつた。

瀬音耳を離れず鮎も喰ひ足りし

二日、(晴) 逢つていろいろ話をして行きたいと思つた日報の森君にも逢ふ機会を暇がななく、晝の列車で、そこそこに糸魚川へ出發する。見送られた歸虚君の愛兒達の面影が眼に残る。

停車場に着いて、待つ間もなく虹寛君の嚴君が嚴丈な姿を現す。虹寛君は待ちかねて三十日に歸京して了つたのである。

ミつかは母堂の運ばれた膳に編み襦袢一つで對ひ合ふに、嚴君が疊みかけて俳論を浴びせか

ける。さうさう、さうである。虹寛君からも聞いたことがあつたが、嚴君は月竝の宗匠にして三十六鱗堂如藏といふいかつい雅號の所有者である。私は強いても他人の趣味や好尚に干渉したり容喙したりするやうな不遜な心を持たない。況して對手は年老いた長者である。私は素直に自分の思ふだけのことを、問はるるままに述べて行つた。嚴君はからからこ笑ひながら、「成程これぢやア一郎のいつた通り、亞浪さんが二晩も泊られたら改宗問題が持ち上りさうぢや。」といつて、それから花の本聴秋さか、大蕪庵十湖さかいふ月竝の人々の評判なきをされた。三十三年鐵道に一身を捧げて來られた人だけに、何處かがつしり尻の据つた所のある人だと思ふ。

夕飯が済んでから、糸魚川訪問の主目的である相馬御風氏の住居に案内して貰ふ。濱風の通ふ二階には、氏に相對して一青年が語つてゐた。良寛の話もあつた。今調べてゐられる曙寛や愚庵の話もあつた。昨年亡くされた子供さんの話から、言葉のいのちに就いての話もあつた。近いうちに信州へ講演に行かれるといふ話もあつた。私が戻りに墓参りをしようと思ふ一茶の話もあつた。今のところ東京に出ようと思ふ心はないといふ話もあつた。佛國から歸つて今信



州の郷里にゐる吉江孤雁氏が出かけて来るかも知れないといふ話もあつた。話はそれからそれへ糸を曳いて、盡くる時を知らなかつたのであるが、如蔵老人に促されてお暇する。庭先の萩むらで草雲雀が金鈴を轉ばすやうに鳴いてゐた。

濱邊へ出るに、月は冴えてゐるながらも、黒々とした夜の幕に閉ぢられた遙かに一線を劃して見える海の果てに、烏賊漁の舟がイルミネーションのやうに綴られてゐる。子供らが渚で亀朶木を焚いて囃してゐる。そして波上に押し流した一束のそれが、沖へ沖へ流れて、燃えては消え、消えては燃える。燃ゆる度に歓聲をあげて囃す。

涼を希つて然も火を感さむ子供の心は、理屈をはなれた原始的な純淨さを持つてゐる。其處が尊い。

### 烏賊漁の火つづる月の海平ら

#### 筏火に月下の海の闇つくる

戻つて来るに、かすかに踊りの聲がざわめきに紛れて聞える。櫓も叩いてゐるやうだ。如蔵老人が盆踊ぢや、大分大勢ゐるらしいぞと元氣のいい聲でいふ。果して踊りの輪は大きかつ

た。郡役所の前で楕圓を描いて影と影とを踏み合ひ踏み合ひ、せつせと踊り廻つてゐる。つくづく田舎は呑氣だなと思ふ。

戻つて寝てからも、しんしんと迫る夜氣の底に、踊りの聲々が、何時までも何時までも、開け放つた雨戸の間から、月と澄んで枕に通ふ。

#### 月と澄む踊りに蟲音通ふなり

三日（晴）今日は親不知見物の豫定である。寝足らぬ眼をこすりこすり何時もより早起きをする。如蔵大人は胃病が起きたといふことで、部下の驛夫を案内者にして呉れた。親不知驛で下車する。山影の涼しさに我知らず足が進む。三軒家（昔親不知の案内者が居た）の手前で海邊に下り、ざくざくと眞砂を踏みしめて渚を辿る。頭を壓して岩壁がおしかぶさり、潮のたりのたりと寄せては返す。なんだかだか名前が付けてあるが、子供の折から聞かされてゐるやうな嶮難の切所も思はれない。「先き釜」といふのが一番名所といふことであつたが、それにて半圓形に抉り込んだ絶壁で、大して珍らしいといふ程でもない。「浄土崩れ」は成程



大岩が崩れ落ちて波がきぶんきぶん打ち寄せてはるたものの、斯うした場所は何處の海岸線でも五十里・百里の間には必ず一個所位はある。茶屋の出てるたのを見て、相當の見物人のあることは察しられるが、今日名所として驚くやうな點は何處にもない。唯明治の初年まで、この海岸一帯が國道であつたといふ歴史の糸を手繰つて、始めてさうか、それでは、さなきだに荒い日本海の波濤の荒ぶる日にはいのちを的の難所であつたに相違ないを肯けるのであつた。大概の名所舊蹟がさうで、歴史的背景が其の重大要素となつてゐる。

歸りはかんかん照りつけられて喘ぎ喘ぎ下車驛まで戻り、晝の列車で糸魚川へ引き返す。御風氏等の來訪を受けて、記念の短冊を交換し、三時の列車で今町に行く。

途中からさつぷり暮れて、八時といふに見附驛に着く。良太君が立つてゐた。心に軽い安堵の情が湧く。

待ちに待ちし汽車の遠音や天の川 良太

俥上に語り合ひながら、小一里の田圃を通つて、今町に入り、定められた旅舎兼旗亭の柳屋に入る。前後して同友天籟・城川君等數名の顔が揃ひ、夕飯がてらに酌み交はしながら打ち解

けた心に語り更かす。何もなく郷里にでも歸つたやうな暢び暢びした氣持になる。他人水入らずの内輪同士のせいでもあらうか。

銀河牙ゆ俥上の話聲親しけれ

四日 (曇) またも颱風襲來の警報が新聞に見える。

暴れ前の無風ぞ銀河澄みまさる

朝から揮毫、午後より句會。見附から白傘花君も出かけて来る。土屋町長も見えて彼れこれ二十名ばかりになる。夕方からししと降り。席題「天の川」の互選を終つて、宴會に移り、句評に兼ねて句作上心得べき要項を話す。大概に打ち切つて酒杯を擧げ、唄ふやら踊るやら、折から曾て紅綠氏に俳句を學んだといふ服部醫學士も來て二次會の御馳走になる。

話聲奪ふ風に野を行く天の川

山の音しんしんと銀河身に迫る



五日、(晴) 良太君がいつも通り早朝に来る。村長の身こして定めし忙しいこゝであらうに。そろそろ揮毫は厭になつたが、いろいろ厄介をかけると思へば、せめて望むがままに書いてやりたくもなつて筆を執る。三條から花臥衣君がやつて来た。何うやら疲勞を感じて、一時三階に身を横ふ。

薄暮、梅露和尚の墓参りに連れ立つ。いい寺だ。一基の大きな碑石の下に先祖やうからやらの遺骨と共に冷やかに眠つてゐるのである。松がこんもりかぶさつて、蟬が頻りに鳴く。黯然とした氣持になる。

蟲よ蟲よみんな來てこの墓に鳴け

町をぬけて刈谷田川の堤上を歩く。如何にも高い堤防だ。ここらあたりの川々の氾濫の狀を想ひ見ながら靜かに歩く。蟬が耳ふたぐばかり鳴き競ふ。

この水の満ちし時おもふ虫諸音

良太君の坂井村は今町の地續きこいふよりも、軒續きになつてゐるが、良太君の家のあたりは樹の間隠れに燈火一つだに見えない。家々の軒の深さを見ても大雪の嚴冬が偲ばれる。

六日、(晴) 憧れの一つであつた出雲崎行きは又のこゝにして、同友諸君のまごころを心に謝しつつ、正午前の汽車で歸途に就く。良太君始め土屋町長・城川・夢涯・烏郎の諸君が停車場まで送つて呉れる。別れる時はいやなものだ。

暮れ前に柏原へ着く。黒姫も戸隠も妙高も雨霧がござして仰ぎ見るよしもない。一茶のこゝしへに眠る小丸山は停車場からの突き當りの名前通りの小丸山だ。雑木の而も若木勝ちで、昔からの大松も大杉も數へる程しかない。何年か前に建てられた俳諧寺こいふ小さい御堂が鎖されて、あたりは森閑こ人氣も無い。其の裏の小高みにある二尺に足らぬ苔むした石碑、表に南無阿彌陀佛法名道證こ刻まれたのがそれだ。うしろにすつくこした杉が一本こ、斜めにくねつた松が一本こ、栗の若木が立ちはだかつてゐる。兎も角一茶の墓らしい墓である。夕闇がほんのりこ漂ひ初めた。

芒ゆらぐのみ蟬の暮れ初むる

芒を當座の手向けこして山を下り、明専寺の高い縁下を見入つて一茶の泣き明した當時を偲



び、右に折れて宿場通りを行く。こゝ二・三丁、左の格子造りの薬家が、ありし日の彼の住居だ（焼け出されてから一茶の死後に建て直したものだ）。其の隣りの當主の彌太郎氏（一茶の曾孫）を訪れて、一茶が焼け出されてから臨終迄のいのちを托した二間に九尺の土蔵を見る。屋根を葺き替へ、壁を塗り替へ、たゞひ見かけは違つてゐても、真正銘のそれである。ウイーミ足元で子豚が鳴く。だしぬけなのに驚かされる。見るに土蔵續きの手前に豚舎があつて、南瓜が縦横にのたくつてゐる。あの貧乏くさい一茶にふさはしい情景だと思ふ。

我に鳴くゐのこや南瓜咲き垂るる

汽車を待つ間、歩廊の闇中に立つて不圖思ふ。一茶ミ加賀様ミ——。ひねくれ者の彼は加賀様を嘗つて「なんのその百萬石も笹の露」ミいつた。其の加賀様の金澤を指して自分は旅立つたのであるが、今また當の對手の一茶の墓參を打ち止めミして明日は東京へ歸るのだ。偶然が偶然でなくなつた。妙な工合ミいへばいへる。——大正九年九月——

## 房州の旬日

雨も霽れたり。用事も片附きたり。意を決して九日（大正十年五月）房州に向ふ。二十餘年前の苦學時代に曾遊の地ミて思ひ出なかなかに深し。途上、椎若葉の花よりも鮮かなるミ、松の穂の槍襖をつくりてそそり立てるミ二つながら我が眼を惹く。

松の穂や去り來山々勢ふさま

亞浪

薄暮北條に着く。蒼々子・光雲・陵雪の三君に迎へられて館山の松岡旅館まで歩く。夕空にもやもやミ群れ舞ふは蚊蜻蛉か。

ががんぼの空かきみだす暮端かな

亞浪

十日、親戚の關根別荘に行く。雨雲次第に濃くなりまざる。夜は句會。

雨霧らふ若葉の中の椎若葉

亞浪



十一日、眞倉の高野山妙音院に詣づ。雨は霽れたれど雲行きしげく、若葉の匂ひ水々し。住僧に導かれて山頂に立てば、鏡ヶ浦一眸に在り、望鏡臺に命ずるのふさはしきを思ふ。

青芒靡けて風の空に消ゆ 亞浪

足踏みしめてやや降れば延壽亭存す。あたり一帯に櫻を植う。

葉櫻の棟木沈めて暮れゆけり 亞浪

雨多き此頃松の穂伸びたり 蒼々子

八十八座の石佛を巡りて、山口に戻る。樹々の茂り身に冷えて、苔清水の音耳に澄む。

梅雨空の静もりに堪へて鳴く鴨か 蒼々子

水呼びの樹々の茂りの身に冷ゆる 亞浪

十二日、北條に轉地中の根水草君來り訪ふ。別莊の人等と共に海邊を辿る。砂丘にへばりて

雨降朝顔の花敷くが如し。

我れに咲く雨降朝顔摘みも見つ 亞浪

午後、蒼・光・陵三君に誘はれて鋸山へ向ふ。

保田よりの途上、こぼれ大根の土手を咲き埋めたる、網架に鴉の居群れたる、高芦の竹の如くに太く茂れる、それぞれ眼に新し。

芦垣の家とりこめて青嵐、 蒼々子

梅雨晴れの網架に轟めく鴉ども 陵雪

日も夏の海光ゆらく風の芦 亞浪

鴉みなもだしゐる照り霞む中 同

小磯川に沿ひつつお山を登る。山卯木の花（朝鮮海棠ともいふ）あちこちに淡紅を綴る、蛇に逢ふこゝ二度、うなじを寒うす。

藤渡り咲く谷底の水ささら 光雲

行基の椎は枯枝を交へて圓通閣を壓す。海中出現の鐘を指もて弾けば、いみじく杜に射す。蛙合戦ありしとふ心字の池は、蛙子轟きて、苔寂び深し。



蛙子の押し合ふ池のゆらぐまで

蒼々子

蛙子や池淺々と木影敷く

光雲

我かけの落ちて蛙子みだれけり

陵雪

吞海樓の展望心潤きを覺ゆ。龜石は人工の跡しるし。

瑠璃深き空の飛燕に眼はなさじ

亞浪

法堂に賽して寺境を巡る。娑羅双樹の幹の黄に映えたる、四方竹の世に稀れなる、一座の石羅漢の逸品たる、ぎりぎりに忘れ難し。

駒鳥鳴くや目奪ふ娑羅の静もりに

亞浪

大黒堂・通天窟・護摩窟を経て、天台石橋に不動瀧を仰ぐ。途々の石の羅漢多くは損じて見るべくもなし。

夏山のなだれ跡なる草咲いて

光雲

若葉照り合ふ木うれに注ぐ日濃やか

蒼々子

それより喘ぎつつ石磴攀ちて、頂上に立つ。展望無比、然も照り霞みて、富士の片影だも望むに由なし。憩ふこと多時。

椎若葉青空截ちて水々し

根水草

眼先き切る鳥も無う海照り霞む

亞浪

雀交る山頂樅の花咲いて

同

下山の途につく。通天窟・薛蘿洞・無漏窟の名は心を惹けるも石佛は亂離して、眼を痛ましむ。唯だ斷層の奇み、寶塔・觀音の全きを稱すべきのみ。白布泉の懸れるあたり、巖壁滴りて歩々に艱む。木下暗うして冷涼徹す。

斷層急に走つて滴るる苔清水

陵雪

遂に踏みしぬかるみの冷えや木下闇

根水草

岩壁に刻み捨てたる大佛は天下の珍也、惜むらくは工半途にしてやみ、漸く潮風に甜られて原形を止めざらんことを。それよりは木下を縫うて一さんに降る。辰州の名山を訪ひ得



たる悦び心に滿つ。

夏山の深き静もり虫鳴いて

蒼々子

暮るるに尙ほ間ありきて、歸途、船形觀音に詣づ。斷崖斜めに走るまゝ横さまに深く抉つて樓脚高く丹碧を鏤め、脚下に近く鏡浦の漣波を望む、心境の解脱に法悦淺からず。海は漸く夕暮の幕を垂れて、弦月眞上に光銚を投ぐ。房州を訪ふもの必ず鋸山に攀つべく、鋸山に到りしもの必ず此處に賽すべきなり。

暮れであれ風ぐ涼しさを鳴く鷗

蒼々子

暮れてゆく五月の海の音も無し

亞浪

北條より夜更けての戻り、カンテラをかざして田中に賽るを問へば、鰯打ちに答ふ。蛙の聲降る如し。

田蛙や泥鰯打つ灯の闇こがす

亞浪

十三日より十四日へかけて降りみ降らずみ、時に無聊を感ず。蜜柑の花芳しく、杜若黄に冴

ゆ。

行きずりに蜜柑の花の匂ふ夜ぞ

亞浪

葉隠れに沈み咲く雨の杜若

同

十五日、晴れたるを幸ひ、根水草君と共に安房神社に詣づ。舊の灌佛會にて那古觀音の賽者相次ぐ。

途上、白土の坑穴散見す、李村君の關れるものこか。切り通しの勝は記すべかりしも、途の遠きにやや困す。安房神社は古へより祀れるもの、然も大幹巨木の觀るべきもの眞に乏し。

ひくろじの實探す若葉明るさに

根水草

諸鳥の晴れ無患子の日の静か

亞浪

布良までゆきて辛くも晝餐をしたたむ。海邊の岩礁を巡れば、佛の日にて漁夫の妻子等る群れて長閑に見ゆ。

一と日風いで遊び足りけん甘茶人

亞浪



歸途はひたぶるに急ぐ、足なかなか痛し。夕餐のあまの毒の如何に旨かりしことよ。

十七日、又もや根水草を誘ふて汐見より見物への濱筋を辿る。海の色眼に親しく、富士始めて雄姿を現す。

海音にはなれじとゆく青嵐 亞浪

汐見の松は臥龍の名に背かず、嵐名残りの汐鳴り耳に高し。

汐騒や地を掃く松のこぼれ花 亞浪

更に半里にして見物に到る、龍蛇の棲みしてふ洞穴の原始的にして、また傳奇的なる欣ぶべし。

日もらさぬ木かげの苔の花愛し 亞浪

この日また晝餉に困す。近く旅館を營むべき藤屋とふ主婦の温情によりて辛くも空腹を満たす。

貝殻の袂に鳴りつ道薄暑 根水草

高芦に打ち込む波や青嵐 亞浪

あくる日は又降り出でて小湊行きも潰れしまま、十九日の午後別れの淋しさにまじしを味はひつつ北條を去る。多謝す房州の友！——（大正十年五月）——



## 自然と人に恵まれつつ

—一月三日—

私はしばらく甲板の間に佇つてをりました。甲板まで打ちあげた潮の飛沫はつるつるに凍つてをりました、足の底からひしひしと寒さが脊筋をのぼります、それにもかまはず私は闇の海空を見入つてをりました。それ程海は私をひきつけるのでした。

船は可成りに揺れてをります、甲板のあちこちに二・三の人影が見えるばかりです、海か空かもわからぬ真闇の底に、ちかちか星が夜の瞳のやうに輝いてをります、その星の瞳と私の瞳とがびたりと打つかり合つた時に、心の底から涙が湧きあがつて來ました、何んのための涙か私にもわかりません。

私は思ひ出すこともなく去る年——十二・三年前に矢張りこの津輕海峡を渡つて往つたこころを思ひ出しました。それは眞夏の涼しい夜でありましたがひさしい荒れ方でありました、それなのに私はある友人と二人で食堂には入つてウキスキーをやりながらたうとう好い氣持ちに寝て了

つたのでしたが、あの頃の元氣が思ひ出されます。一體私は海に強いといふよりも海が好きなのです、——海の好きな程度に山も好きですが、或は山に生れた私にして海は珍らしいのかもわかりません。

函館はさつちか知らし思ひながら闇の底を見透かすやうにしてゐます、埠頭に私を待つてくれる筈の稻香君の顔が浮びあがつて來ました。平田君も來てゐるだらう……今夜は何處に泊めてもらふのかしら……成らうこころなら湯の川へでも往つて、ゆつくりからだを休めたいものだが……と思ひます、からだの悩み——髻のかぶれのこころがむくむく胸をついて來ました。

今朝も今朝はばかりに往つて見る、昨日家を出る前につけた薬が、髻一面にぶつぶつかぶれ出して、またかと思ふこころするやうな怖れが脳天に渦巻いたのです。さうして斯う皮膚が弱いのだらうか、途中で引き返さねばならぬやうなこころになりはしまいか、折角の旅だのになア……と思ふこころに泣きたくなりました。それでもさうなるものか、成るやうにしかならない、行けるこころまで行つて見よう……こころが決して來る、幾分氣持が樂になつたの



でした。——今その事が思ひ出されたのです、思ひ出すとぞつと寒さが私の心に喰ひ入つて来ました。襟巻にぬくぬく顔を埋めてはゐましたものの、奇妙に頸筋がぞくぞくするのです。いやに悟つたやうなこみを言つてゐても、矢ッ張り私も人間です、病氣にも寒さにも人一倍弱い人間です。

ああ雪が降つて来ました、星が粒々に光つてゐます、私の瞳に星の瞳がまた打つかり合ひました、私の心を救つてくれるのはあの星かも知れません。

### 星粒々と粉雪ちらつく海の空

埠頭には思ひがけない矢田君も来てゐてくれました、嬉しいこみです。それに希ひ通り湯の川へ連れて行かれるこみになつたのです、電車に乗つて尻を落ちつけるこみ、始めてほッこしました。

何ものよりも強く私の眼をひいたものは、お高祖頭巾でした、お高祖頭巾を被つたあのか、巻きにくるまつてゐる若い女達の姿でした。二十年こいふもの夢のやうに過ぎ去つた、その夢の世のさまが甦つて来ました。現實の世界さかけ離れた夢の國がまざまざ私の前に展けたの

です。けれどもさうした夢に浸つてゐたのも、ほんの一ツ時のこみでした、その艶なお高祖頭巾を照らし出した電燈の光りはちかちか刺すやうです。爪先から凍みあがる夜の寒さ、そのきびしい寒さ——あちらではしばれるこいつてをりますが、全くしびれるやうな寒さです、或はそれから轉訛したものかも知れませんが——に現實の世界をこり返した私は矢ッ張り北海道だ、寒いなアこ思ひました。

これから次ぎ次ぎに繰りひろげられる雪の國のまざままな相が、私の心を次ぎ次ぎに躍らせるこみでせう。私の心はまた夢の國に還つてゆきました。

### お高祖頭巾のおとがひ細き灯影かな

かぶれや何かの心遣ひも宿の温泉槽にこつぷりこ浸つてゐる間は、私の心を離れてをりました。注ぎ落つる温泉の音こ、溢れ流るる温泉の音こがからみ合つて隔々に消えてゆきます。ほのかに射し込む雪明りに浮き出た私の顔に矢田君の顔こが定めし安らかに見えたこみでせう。

### 雪明り湯にひたる夜の心遠し

私に矢田君は枕を並べて寝につきました。稻香君と香苗君は別室で、木石君は歸つたこ



いふことでした。可成り更けてをりましたが、静かになればなる程、かぶれの惱みが甦つて來ました。矢田君が傍に寝てゐてくれることが何んぼう心強いことであつたでせうか。

「先生、札幌へお出でになつたら、丁度池田君のところで時雨の句會があつて、一寸お立寄りをお願いになつてをりますから、その時診てお貰ひになつたらいいでせう、池田君はその方の専門でもありますし……。」

矢田君が力づけてくれました。さうだ、さうする外はない、色々心配をしても仕方がないと思ひあきらめて蒲團に顔を埋めました。それでもなかなか眠りつけません。折々二人の蒲團の端しと端しとがさらさらと摺れ合ひます。矢田君もなかなか寝つかれなかつたといふことでした。

蒲團すり合ふ旅の泊りの頼母しや

蒲團ぬくし語りあかねば寝るとせう 波舟

— 四 — 日 —

旅の第一夜は恙なく明けました、酒に囚はれた稻香君をせきたてての電車の中での君の子供のやうなやり方、その挿話<sup>エピソード</sup>は暫らく内證にして置きます。何んといつても面白い男です。

本當に際さいところで汽車の間に合ひました、矢田君が可成り氣を揉んだといふことです。スチームのぬくみを感じて來ましたら、あたり硝子窓が曇つて了ひました、それを拭うては私に外の面を見せてくれようとする矢田君の心遣ひには涙がこぼれさうです。

大沼が近づきました、舟を泛べて遊び暮らしたあの時から見るに大分に様子が變つたやうです。あるがままの自然の姿の靈妙さに考へ及ばない人達の手入れといふものは大方打ち壊してあることを思はずにはゐられません。

一面の雪を抽いた毛木のやうな雑木林に汽車の煙りが紫淡く影を落しながらからまつてゆきます、その林から次ぎの林へ。

空林をめぐり消えにつ煙りの尾

俱知安のその夜もまた矢田君と枕を並べて寝たのでした。何んにしても旅は旅です、淋しいものです。雪が可成り深いだけに夜の寒さも一しほに思はれました。それもその筈です、夜明



けて見ましたら窓の先きは雪がいつばいになつてゐました。氷柱は土に刺さりさうです。爐はあつても炬燵はないので、櫓をこり寄せて横になつてゐたのでした。七浪路君始め來る者來る者若い人達である。こゝに或る氣強さを覺えました。

さしきしと雪踏む音の夜の路

窓外の雪しんしんと火の香立つ

—五— 日—

東京を立つてからもう四日になりました。待ちに待つた聽濤衣君がやつて來たので、心持ちも賑やかになりました。句會へは何もかといふ橋をつけた俤に乗つて往つたのでした。途上に見かけた雪おろしや雪切りの行事が珍らしく思はれました。雪がちらついてゐましたもの、茜をふくんだ晝過ぎの日輪のかがやきは雪に空に響きもしさうです。子供達がわめき交はしての路上のスケートも流石に雪の國だと思つたこゝでした。

雪切つて車通はす日の響き

雪おろし子の聲々のほしりゆく

會場は小學校だけにならんしてゐましたが、ストーブのいきれが惱ましいほぎでした。八雲から北莊君や子蛟君らがやつて來てくれたのも嬉しかつた一つです。作句から選句、そのあとの講演も終つた頃には夕暮れのさばりが可成り濃くなつてをりました。雪の曠野にはだかり立つ蝦夷富士の影は寒いといふよりも、嚴くしさを思はせます。希くは今日のまざるの人々の上に幸ひあれ！…私は斯う念ぜずにはゐられなかつたのでした。

冬を籠れば蠅も友なる氣の弱り

冬籠一と日淵然と野ゆきけり

軒の氷柱に息吹つかけて黒馬よ黒馬よ

氷柱ばらばら薙ぎ捨てて胸ひらきけり

冬籠り土を戀ひ寄る鳥あはれ

第一次の句會の終つた安らかさ、これでかぶれさへなかつたらこしみじみ思ふのでした。爐



にかんかん炭火を起させて、一杯やつてゐるうちに誰れ彼れも若い人達が押しかけて来た上、仁木の汀花君も遅れ馳せにやつて来ましたので、話はそれからそれへははずんでゆきました。爐の火は紫の焰を立てて咽ぶばかりに熾つて来ました。爐の匂でも作らうではないか、皆が皆額を寄せ合ひました。

戻り来て火の氣なき爐に心固し

皆あたれ爐の火がどんと燃ゆるぞよ

—六— 日—

笑石君と汀花君に迎へられて、仁木の停車場を出ました、殖民地らしい寒村だと思ひました。きしきし、きしきし雪を踏みしめてゆきます、並木の落葉松が無惨に伐り倒されてをりました。なんのわけもなしに、私はむごたらじい感じに打たれました。

笑石庵、それは小學校長としての笑石君の舍宅でした、床柱に吊られた狐の皮が直ぐ目についたことでした。素直な笑石君、つましやかな汀花君、それにおきなしい集まりの人々、

私の心はさうしたなごやかな氛圍氣につつまれてゆきました。少し凝りすぎはしまいかと思ふ程汀花君が熱心な作家であることを嬉しくも思ひました。

リンリン、リンリンと頻りに櫓の鈴音が耳をそそつて行き過ぎます、雪が櫻の冬木をかすめてこんこんと降つて来ました、夕影も濃くなつてまゐりました。またしても櫓が行き過ぎます、そのリズムミカルな鈴音が何處何處までも私の心を引きずつて行きさうです。

櫓の鈴消ゆく冬木のけぶるなり

唸りを立てて吹きつくる雪の中を小櫓に着いたなと思ふに、「白田さんはこちらにおるのですか。」と見廻しながらは入つて来たのは、郭公翁その人でありました。思つてゐたよりも福よかな好い小父さんでした。長いこと手紙の上での知り合ひではありましたが、そのあるがままの温か味を何よりも有り難いことに思ひました。見かけたところ還暦の年配でありながら、本當の俳句に目覺めて懸命に努めてゐられる精進の姿は、同じく六十にして初めて俳句に指を染められた川面十方化翁と併せて俳壇の好對をなすものとも申しませうか。

札幌に着くと直ぐ池田病院へまゐりました、藤六さんは弱いとは聞いてゐましたものの見か



けは如何にもがつしりこした人です。選句にも作句にも人一倍骨を折られるだけそれだけ藝術的良心の強い人だといふことでした。あの時雨が地方雑誌には珍らしい気持ちのいいものであることにも尤もいふことができませんでした。——それが先頃郭公翁の便りによること、私が歸つて間もなく神經衰弱に罹られて暫らく休刊の餘儀ないことになつたこといふことですが惜しいものです——雪公子・黎明の山尾兄弟や一秋・麥秋君等若い人達の顔を見ること、直ぐ寥々君や鴻村・木同の諸君を思ひ出させました。同じく學生であるばかりでなく、ぐんぐん遺つてのけようこするその意氣込み、若い者共通の純な一本氣なことが、それこそこれを繋がしめたのでもありませんか。

六象國手に早速診てもらひますよ、「なに御心配はいりません、この薬は夜、この薬は晝御つけになれば大丈夫です。」といふことで、この位ほつこしたことはありません。四週の後旅を無事に續け得たのも全く六象君のおかげでありました。

ほんの僅かな時間のうちに選句をしたり批評をしたりして、また汽車の人になりました。寢臺にころがつて、本當に氣安く寢込みました。

爽やかに眼が覺めること、汽車はまつしぐらに雪の曠野を走つてゐました。根上りに伐り倒された木株が眼につきます、冬木交りにこご松の黒々としてゐるのも、北海道らしい林相です。「先生落滑へ来ました、牧韻君が來てゐる筈ですから……。」と矢田君が注意してくれる間もなく一寸のぞき込んで入つて來ましたが、獸醫の書き入れ時といふことで、次ぎの驛で別れねばならなかつたのです。

オホツク海が見えて來ました、さす黒い潮を湛へて薄曇りの空に雪原を劃つてをります。流水が見られたらさ思ひましたが、一月末から二月頃でなくてはさいふことでした。枯葉をさめた柏の大木が眼をそそります、柏はさ松と共に北海の代表的な樹木です、殊に日高は柏ばかりで曾て枯柏といふ俳句雑誌もあつたといふことです。私が、波乗り舟の音のよきかな、さいつては矢田君の雅號の餘りに平凡であることを擲論つたので、矢田君もたうさう枯柏を代へようといふことになりました。聽擣衣君が例の元氣な調子で、出來たツさいつて示した。

寒風ぎの海が見ゆるぞ枯柏

聽擣衣



この一句は矢田君に呼びかけたやうだね、さいつて笑ひ合つたことでした。

野付牛の一夜は恐ろしい吹雪になりました。句會は呑空庵の二階でやつたのですが、電燈はしばしば消える、家はみしみし揺れる、その中であんらかんに笑ひこける呑空君の様子がいつまでも耳底にこびりついてをります。呑空君は大竹をすばりこ割つたやうな人です。宿に歸つたのは一時過ぎ二時近い頃でありましたらう。吹雪はますます烈しくなつて來ました。

月やしばるる氷上渡る櫂の鈴

炭火の香滿ち來りいつか眠り落つ

吹雪の中をさまよふ寒念佛の鉦が強く胸を打ちます。寝つくまでの思ひは時の流れを溯つてゆきました。

この土地で名前馴染みはほんの二・三人だけです。それであるのに今夜の句會の賑やかであつたよろこび、そして可成りに佳い句を見出したよろこび、その上私の句論に賛してくれたよろこび、それから竹田君がはるばる斜里から迎へに來てくれたよろこび、私はすさまじい吹雪の音も忘れてさうしたよろこびに思ひ耽つたのです。

俳句を通して心から心へ通ふその温かみ、逢ふ人毎に舊知のやうな打ち解けたその親しみ、それは私等にのみ恵まれたまことの現はれも申しませう、私は後半生を俳句に托したよろこびを感じずには居られません。さうです、本當に超黨派的であります、超時代的でもありません、希ふところは一代に一句の句主なることです。一代に一句の句主たり得ずとするも、一代に人間らしい人間なることです。若し人間らしい人間になり得た上に、一句の句主になり得たさしますならば、臨終の夕べにこれほどのよろこびはありますまい。

雪に吹かれ影のごと消ゆ寒念佛

八 日

起き出たばかりのころへ呑空・惠秋・桂月君に續いて桶戸から來遅れた燧洋君もやつて來て、立ちがけにまた運座さいふことでした。それに矢田君が枯柏を改め、野田君に春樹をつけやつたころから我も我もさいふことで、竹田君は凍光、惠秋君は寒汀を改めましたのもお互ひに忘れ難い一つ一つです。寒汀君のあの洒脱な言動、桂月君のあの温和な應酬、燧洋君のあ



の熱心な態度、そしてしのぶ君や夢人君や凌波子君のこころなごもあれこれ思ひ出されます。呑空庵の柱にかかつてゐた、大食堂なんぞかいふ某大家の句のこころなごは忘れませう、忘れませう。

吹雪のあまの鋭い日ざしが野に丘に注がれてゐます。雪除けの蓆圍るが其處此處に日影を滲へてをります、向うの丘はすっかり雪が吹き掃かれて枯草が燃えもしさうです。すすいこ枯れ立つ草間の雪に流れてゐる日脚は餘りにも冷たいと思ひました。

日さびしく雪の草かげぼそとあり

野付牛から迷二君も一しよでしたが、女満別からまた水上君達も乗つてくれたので、可成り賑やかになりました。見渡すかぎりの枯芦原が展けて來ました。日がかんかん照り渡つてゐるかと思ふご、さつこかげつて風さへも出て來ました。私達がぬくぬく旅してゐるにつけても、あの芦原の小家が如何にも寒さうに思はれます。

枯蘆に住める小家よ日が當れ

網走湖にかかつて來ました、「あッ、ガスがガスが。」こいふ聲に、はるか行く手を見やりま

すこ、濛々こ眼路を塞いでをります。こまた「ヤツ吹雪だ吹雪だ。」こ耳底に響きました。さうですガスではない湖水を閉ぢた氷上の雪が疾風に煽られて、吹雪を起してゐるのです。見る見る窓硝子に唸りを打つて吹きつけました、湖畔の森にかかつた時のすさまじさこいつたらありません。

吹雪襲ふ枯木が中の小家はも

枯サピタ吹雪の中にぼそと見ゆ

氷上の雪吹く風に日ざしけり

宿へ着いて一ツ時靜かになりました、網走驛長の峰洲君の話によるこ、吹雪のためこの後の汽車は四時間延着こいふこころでした。ああよかつた、一日遅れたら、日程に二日の狂ひが出來たのだこ思ひますこ、しみじみ自然に惠まれたこころが感ぜられました。皆が皆今夜の句會に宛てたこいふ別室へ出かけて行きましたので、私はごろりこ熊の毛皮に横はつて煖爐にあたたまりながら、今も今思ひ浮べた自然の惠みこいふこころに考へ入りました。

いや、私は自然に惠まれたばかりではありません、随分こ人にも惠まれて來たのです。聽掃



衣君は一足先きにやつて来て、總ての打合せをした上に俱知安まで来てくれる。枯柏君はまた函館まで来てくれた上に、勘定から何から一切の用事を辨じてくれる。そして二人が二人寝るにも起きるにも痒いところへ手の届くやうに私の面倒を見てくれる……いや、いや、あの二人のみではない、到る處行く處、誰れも彼れもがあの通り心から私を迎へ送つてくれる、六象君のおかげで病氣の方も大分快い、この分なら明日の橋の旅も大丈夫だらう。此處へ来てからも孤葉君や水上君や峰洲君の心遣ひも一と通りではないらしい。……私のからだを氣遣つて麒麟草君もム弓君も拵へてくれた薬が若い元氣な二人に役立つて、私は風邪一つ引かないといふことも、自然に人のおかげです。

少し暗くなつて来た、日が暮れるのか知らぬ思つて頭を擡げると、またもや轟々来た吹雪の窓越しにほのかな茜がさしてゐます。あッ今日も暮れるのだと思ひながら、私は起ち上つて廊下に出ました、そして西の空をじつと見入りました。

ああ、日が落ちてゆきます、屋根も森も一樣に吹雪に閉ぢられた大空の果てを金色にぼかしてくるめきながら落ちてゆきます。日一日もろもろのいさなみの上に大慈の光りを投げた大日

輪は、明日の日を恵む生々の光りをうちに包んで徐かにくるめきながら落ちてゆきます。ああ、自然に人に恵まれた今日の日も恙なく暮れるのです、私は胸がいつぱいになりました。

### 今日も暮るる吹雪の底の大日輪

北見の腕揃ひの競詠だといつて枯柏君はひりりいきり立ちました、成る程可成りの出来榮えではありましたが、凝りすぎるのもあれば、ぞんざい過ぎるのもあつたことを忘れてはならないと思ひました。羊々子君の前途が期待されます。明日はいよいよ橋の旅です、それに吹雪も霽れさうです、今夜はゆつくり休みませう。

### 枯柏ひちひちと鳴る日充分

### 灯が見えて人の戀はるる野の吹雪

— 九 — 日 —

橋が最う来てゐるといふ、それも斜里から迎へに来てゐるのだといふ、時計も八時を過ぎてゐる、我れ知らず心はずんで来ました。硝子戸の隙間から吹つ込んだ雪が山形をつくつてを



りましたが、その花形に凍れた硝子戸越しにも、ちかちか青空が覗かれます。リンリン、リンリン街をゆく橋の鈴が、遠く青空に響いて朝の心をそそります。

さあさあばかり出かけます、毛皮のつぎはぎの袖無しを着た少年の御者が手綱を控へてをります。誰れもの顔が晴れやかに見られました。

母衣をかけた火鉢を入れるに酔ふかも知れないふ凍光君の用意から、むき出しのままに殊更湯タンポを入れて呉れました。ぬくぬく毛布圍や毛布にくるまりながらも、たまたま頬を刺してゆく雪風は銀針のやうです。何んといつても、齒磨きブラシのサツクが指先きにびたり凍てついた程ですから。

少年は鞭を擧げました、カツカツいふ蹄の音、リンリンいふ橋の鈴、スウスウいふ橋の軋り音が、交響樂のやうに青空にもつれてゆきます。

坂上の大平らに登ります、雪はそこ此處吹き掃はれて橋脚が鈍くなつて來ました。折り折り凹みへ流れる度びに膽を冷やさせられます。

オホツクの溝に噛まるる漁村を出ぬけます。路は一層凸凹が甚だしくなつて來ました、橋の

流れ方もはげしいので、凍光君が自ら手綱をこつて少年に手綱捌きを教へたことでした。流石に雪の國の自然兒を思はせました。

路の路の岐れ目にかかる、あつと思ふ間もなく橋は横倒しになりました。私は突差に手をついたので轉げ出しもしなかつたのですが、凍光君と枯柏君とは、やにはに外へ飛び出しました。聽壽衣君は私の右にゐたので、わアミ聲を揚げたばかりです。少年は凍光君に叱られながらもほかんとしてゐました。

暫らくして川口の氷沼にかりました。さうも氷が薄さうだ、橋がめり込むかも知れないといふので、凍光君が代つて馬を叱り叱り渡りかけましたが、見る見るめり込んで、ざくざく水氷が橋を浸して來ました。私等はたうとう橋を捨てて氷上を歩きました。私はしか凍光君の腕に抱へられながら。

凍沸湖が氷つてゐて呉ればいいが! 同じ思ひが四人の胸に湧いたのでした。

凍沸の町をさつさぬけて、いよいよ湖畔に橋を控へました。

うまく氷つてゐるか知ら?



四人が四人、打てば響く堅氷を念じたことでした。またもや凍光君が馬を御しつつ氷上を湖畔に沿うて走らせましたが、何事ありません。橋鈴はリンリンと雪を撒きつめた氷上を響き渡ります、寒いながらも日はかんかん照つてをります。裂氷のあみが縦横に走つてその鋭い反射が眼を射ります。皆の腫色が和んで來ました、私等の念願は届いたので。

遙か右手の山際近く三々五々の人影が見られました、それは氷魚漁をやつてゐるのだといふことでした。枯柏が三五間の間を置いてずらりと氷湖を劃つて植ゑてありましたが、それは吹雪の時の目標にするためだといふことでした。

橋はすうすう走つてゆきます、鈴はリンリン、リンリンと響き渡ります。こ私等の橋に小半町はなれて、小さな箱橋に男の子を乗せてその父親が静かに引つ張つてゆくのが眼に入りました。氷上さはいへ、なごやかな日影をひいてをります。

#### 橋の親子に寒風の日が惠まるる

橋の鈴、蹄の音、その刻みゆくリズムに乗つて、犬めがすたすた走つてゆきます。道草を喰ふすべもない氷上まで、一心にすたすた走つてゆきます。それを見つめてゐるこ涙ぐましい

までしほらしく思はれました。犬は可愛いものです。

#### 犬よ犬よ雪を蹴たてて橋を追ふ

日は高う高う懸つてをります、三里の氷湖もいつか後ろになりました。私等はこある茶店に橋を止めました。二・三の人達が土間の暖爐を圍んでをりました。その時の一杯の酒、一杯の飯の如何に旨かつたことせう。惠まれた日の満ち足りた心のよろこびでもいひませうか。

橋はしばらく蓬々たる蘆原を走りました、蘆原に續いて蓬原が展げました、雪を抽いた四五尺もの枯蓬は私の眼を見張らせました。海を劃つた左の丘に枝を交はした大柏も、あるがままの北海の姿です。

日は最う餘程西空に傾きました、柏の枯葉はけさやかに夕影を反してゐます。

#### 橋の四人に夕茜ひく雪の原

月が月が、こいふ聲に遙かの空を見上げます、ぼうと夢のやうに暮れかかつた蘆原に三日月が懸つてをりました。眼を落した路傍の草間に赤い實をつぶらにつけたのは思ひがけない玖瑰でありました。



すいすいと穂草が暮るる雪の原

頬に觸るる雪の穂草の暮れ切つたり

濱茄子の實がほんのりと月かかる

「斜里が見えて來ました、あれ、あの高臺に灯が見えてをりますのが、今晚お泊りになる家です。」こいふ凍光君の聲に、私ははつこして行手の夕闇に瞳を凝らしました。そしてつひ知らず

櫓よ走れよ我が雪車走れ今宵泊りの灯が見ゆる

斯うしたものが口を衝いて出ましたのです。

間もなく私等は、その吉川邸の客になりました。北見第一の材木商で立志傳中の一人だこいふこいでしたが、如何にもがつしりこした矢でも鐵砲でもこいひさうな人でした。

校長の靜燃君も來ました、役人の吳子君も來ました、吉川さんの舊主に當るこいふ赤光車君も來ました。その温かい心こいこい、斜里の第一夜は夢も安らかでした。

—十—

日—

書きものに紛れてゐましたが、いつか雪空になつたやうです。電燈の點いた頃には風も強く  
なつて來ました。

こつこつ唸りをあげる度びに、みしみしツミ家が揺れるのです。いよいよ吹雪になつたのだ。高臺でしかも二階の、オホツク海に臨んでゐるせゐもあらうが、その揺れ方こいつたらありません。

「もう皆集りましたから……。」こい凍光君が迎へに來ました。吉川さんの長靴を借りて出かか  
ますこい、まこいにも吹きつける雪は目潰しのやうです、ひゆうつこい凄まじい叫びのあがる毎に踏  
みしめた足をこられさうです。私は幾度び立ち盡したこいでせうか。凍光君が見かねて左腕を  
しつかこい抱へてくれました。

夜の吹雪さきゆく影の追はれけり

思つたよりも多い集りの中には、古い土の匂ひに浸つてゐる人達も少くはないやうでした。

火鉢の灰代りにサラサラミした積砂を入れてありました。それが火箸を動かすままに、炭火



の崩るるままに、音もない音を立てつつ小さな粒々の火になつて焔の底に沈りゆくのです。

新しい人達の無理な言葉遣ひも、古い人達の理窟でまろめた句も、その極端に極端を接してゐるやうに見えたことは注意すべき事柄ではありませんまいか。

月がさす棚の鍊の煮こごりぬ

宿に歸つての吹雪のすさまじかつたこと、眠らうと思つればするほど眼が冴えて來るのです。

……誰れやらが管長を呼びかけてゐたやうに、橋を驅つて馬を叱るその姿は正に管長らしき元氣を見せてはゐるますもの、凍光君はやつぱり涙の男です、血の男です。一昨夜二人きりで網走の宿の風呂につかつた時、涙に咽んだ身の上話がまさまじく思ひ出されました。

こうツ、みしみしツと吹雪の猛る毎に、額に頬にヒヤリとしては現なの魂を呼び覺まされます。それは何處からか粉雪が吹き入るのでした、戸が三重にもめぐらしてあるのに。

この家が潰れたら……潰れて死んだら……さうしたはしたないことまでも闇中に描いて見るのでした。私は地震よりも怖ろしいと思ひました。三時を聞き四時を聞きました……その後は思ひ疲れて寝たものでせう。

爐さかれば水松の香の聴かれけり

目つむれば吹雪の浪の頭に響く

吹雪聞く氣の衰へも旅寝かな

— 十一 日 —

吹雪はまだやみさうにもありません。廊下といふ廊下には、かほごに雪が吹き入つてをります。吉川さんが来て「私は風が嫌ひでしてね、さうです、風のあたらない家へまゐりませう、直ぐ其處です……今日は迎も雪車は出ません、私もやめにしました。」とすすめてくれました。私もゆふべから日程の狂ひを思ひ悩んでゐたのです、一日の逗留は身體を休めるには却つて仕合せではあるものの、各地の人々には濟まないことになる、さいつて自然の力にはあらがふべくもない。聽・枯兩君とも相談の上一日延ばすことにして、出かけて往つたのは、前夜よばれて往つた、それも吉川さんの持家で赤光車君の舊居であつたといふ旗亭でした。

寝たり起きたり、飲んだり食つたりしながら、日一日練習的な句作で皆を苦しめたことでは



た。

誰れもゐねば火鉢一つに心寄る

火鉢の縁をなでては心寄せ合へる

風が冴いで來ました、雪もやんで來ました。硝子戸越しに土蔵の一角が赫々紅に燃え立ちました。はつこ思つたのですが、それは夕日の日矢が注がれてゐるのでした。

赤光車君が「海がよく見えますから……。」といふのにそそられて二階へ往つて見ますと、西空の果てには今か夕日が黄金のくるめきを見せてゐますのに、東の方眼下の海は、一面に暗黒の潮を湛へて、さながらの死の海を想はせました。

暮れゆくや寒濤たたむ空の聲

——十一 二 日——

私等の橋は、丘阜の柏林を右に見て、ツツツツ、ツツツツとつてゆきます。橋の鈴は、大晴れの青空にりんりん、りんりんを返返しに響いてゆきます。二日三晩といふもの、旅の私を

かぎりない温かい心に包んでくれた斜里の町も人も最う見えなくなりました。氣遣つた雪溜りもなく、道筋はすつかり吹き掃かれてをりました、あの烈しい風のために。

何んこいふ大風ぎでせうか、照り渡る朝日もこの雪原は、一面の陽炎に天も地も、物こいふ物がゆらぎもしさうです。その雪の面に投げられた柏の一本一本、一枝一枝は紫深い朝の影を滲ませてをります。はるか彼方の雪霞を抽いて立つ柏林は枯葉が金色にかがやき合つて、さながらに霜晴れの柿林を見るやうです。

後から後からとやつて來る橋の鈴！

前から前からとやつて來る橋の鈴！

その甘い響き、その温かい光り、全く夢の國の夢の姿です。さういへば、さつきから聴き取つた君も枯柏君も夢の人になつてをりました。

雪影の紫深し枯れ柏

途中で小休みをしてから靜燃君が私等の橋の人になりました、凍光君に代つて私等を網走まで送つてくれるのです。



私等の橋は鹿毛の逸物だけに、走るは飛ぶは、何時も先頭を切つてをりましたが、濤沸湖上は舞ふがやうの速さを思はしめました。斜里のお山は霞の衣に蔽はれて夢もまごかに顧みられません。

網走に着いたのは三時頃でもあつたでせうか。日程が一日狂つたこはいへ、吹雪のすさまじさも體驗が出来ました、夢の人になつての橋の旅も出来ました、まごまでも自然に恵まれたことを思はずにはゐられません。

網走の人々ミ夕餉のまざるを終へて後、宿に戻つて復たもや句三昧に入りました。

木出し晴れ枯木の音の聞かれけり

足穩にかけて枯穂を飛ばしけり

爐の爪甲鼠がちらと影見せし

——十 三 日——

發車の笛を聞きながらあたふたこ乗り込んだのですが、大鞆はこいつて気がつくこ、何處に

も見當らないのです、さア、困つたこが出来た……實は發車間際に十分五分こかぞへながらも、驛長室で望まれるままに座額を書いてゐたのですが、誰れも彼れも乗車にのみ氣をこられ、つひ忘れて了つたのです。今夜は本別の句會だ、それに澹如君始め國者の多い土地だ、こ思ふこ、いふまいこ思ひながらも、我れ知らず小言が出て了ふのです。枯柏君も聽壽衣君も困りきつたやうです、私の頬も定めしふくれてゐたこでせう。聽壽衣君があこ戻りをして持つて来るこいふこになつたのですが、峰洲驛長から、次の列車で本別へ送り届けるこいふ電報が来たので、兎も角ほつこしたやうな譯でした。澹如君の家に着くこ、訪ねてくれた人々、迎へてくれた人々の大半が信州人のしかも佐久人であつたこは、國へでも歸つたやうの思ひがされたのですが、また我儘の出来ない窮屈さをも感じたこでした。

句會も濟み、御馳走にもなつて引きあげたのは一時過ぎた頃でした。和讃をうたひながら練り歩りく寒念佛。團扇太鼓を叩き歩りく寒念佛、讚美歌を唱へながらの寒念佛——それが代る代る外の面の雪を踏みしめてゆく音が耳について、妙に眼が冴えて了ひました。

宵々に雪踏む旅も半ばなり



旅心深うす雪の念佛衆

私は忿つてはならない筈であつた、心を平かに持たねばならない筈であつた、それなのに今日こいふ今日は何んこいふこいふこいふであつたか、私が小言をいふまでもなく、二人が二人困つたことをしたと思ひ惱んでゐるに相違ない、それなのに私は小言を繰り返したのである。それもこれも私の心が緩んだためだ、心に隙があつたのだ、自然に人の恵みに馴れ過ぎたのだ……こ思ひますこ如何にも二人に濟まないと思つたこです。

隣室からは、かすかな扉がもれて來ました、もう二人は眠つたのです。……何んこしても二人に餘分な心配をかけたか、嫌な思ひをさせたのは濟まないこいふこいふであつた、それが縦令一ツ時の間にしても……さういへば、凍光君にも苦いこいふばかりいつてゐたのが思ひ出される……さうだ、私はもつこ、もつと自分の心に鞭打たねばならない——。

凍光君のこいふを思ひ浮べるこ、斜里を立つ朝、令政を見送りに來てくれた、あの可愛い鳩のやうな瞳をかがやかせてゐた、そのひさり子の影がふみ間の眼な先きをかすめました。出来るこいふなら、人間にはいつまでも子供の心を保たせたい。恐ろしいものは智恵に長けた人間です。

す。

さうさう、今夜の句會で、澹如君が「私共は月並も月並です。」こいはれたが、そして私は、月並を月並と知れば、既に月並を脱したものです……こいつたのであつたが、果して月並を月並と知つてゐる俳人が幾人あるであらうか。月並を月並と貶してゐるそばから、新しい意味の月並に落ちてゐるやうに思はれてならないのです。

また鶉が鳴いた、二番です、闇中のそこ此處から寒さが押し迫ります。

— 十 四 日 —

狩勝越え！ 想ひ見るだに胸が展げるやうです。うねりうねりつ登りゆく汽車、その汽車の窓から越し方を瞰下ろした十勝の自然の象！ 山又山の彼方此方に雪を抽く大木の焼け木は旅の心を一しほいたしました。

大木の焼け木に飛ぶよ冬の雲

石狩の雪原を割ぎる冬木の空に流れた茜雲は、目覺ましいばかりけさやかな光りを投げて居



りましたが、見る見る茜が薄れゆくと共に、紫淡い光りを漂はして夕暮れの寒さを誘ふのでした。やがてその紫もさめ切つて了ひました。夜の幕に包まれてゆく旅人の心は何んぞいつても淋しいものです。其處此處にしよんぼり立つ冬木の姿に思ひを寄せずにはゐられません。

紫さめて雲も暮れゆく冬木かな

瀧川の夜のまごころも賑やかなこゝでした、途中の金山から乗り合せた薫都君がデリケートな感情の持主であるこゝを親しくも思はれました。草雨君の濃厚な物ごし、大黃君の潤達な面ざしが眼先きをちらつくやうです。

土見れば土啄みつ寒雀

——十五日

また吹雪になつて來ました、札幌の驛前へまごころに吹きつけて來る雪の勢ひは宛ら目潰しのやうです。

角定の一室に落ちついたと思ふ間もなく逓信局の田波さんから電話で、今朝東京に再度の大

地震があつたためごたつて居つてお迎へにもゆかれなかつた……こいふこゝでした。私ははつこ胸を打たれました。……多分落ち残りの壁が落ちたぐらゐのものだらう……こは思ひながらも、九月一日の死滅の姿がまざまざと甦つて來ました。郭公翁が早速タイムスへ問ひ合せてくれましたが、焼け残りの山の手は全滅、市内三ヶ所に火の手があがつてゐる、附近の鐵道も電線も破壊され、僅かに一回線が通じてゐるばかり……こいふこゝで、山妻や小姪は無事だ……しても、活版所が復た焼けはしまいかと思ひますこ、心は闇の底へ引きずり込まれてゆくやうです。

私は萬年筆を執つて留守宅へ安否問合せの電報を書きました——旅立ち以來筆を執つたのはこれが始めです、病牀の凍鶴君に丈けでも往く先き先きで繪葉書を送つてやりたいと思ひながらも、それすら果し得なかつたのですが——。

日は暮れ切りました、夕飯も済みました、そろそろ會場へと思つてをりますこ、タイムス社から電報を届けてくれました、留守宅から無事の返電が着いたのです。私は吹雪のあゝの大晴れのやうな氣持を取り返しました、事實吹雪も晴れかかつて來たのです。



道廳俱樂部での句會は流石に札幌だと思ひました、相當にすぐれた作家も揃つてをり、人數も今までになく多い上に、可成り遠方からも來てゐるこいふことでした。それに層雲の中堅作家の山岡夢人君も見えてをりましたが、思ひの外のおこなしいな人柄に心を惹かれたことです。

井泉水君が季題は否定しても、内容上自然禮讃を目ざしてゐる點は、私等も略ぼ同じい歩みをこつてゐるものこいふべきです、唯だはつきり違つてゐるのは、形式上自由律をこつて俳句本來の形式を否定してゐることです。素より形よりも心で、心の尊いこいふまでもないが、心ばかりでは魂ばかりでは人間の存在は認めかねます、人間としての形がなくてはなりません。詩の世界、俳句の上に於てもまた同様のこいひはれます。心こ形こ、形こ心こは一體不二であるべきです、そこに俳句の存在が確認されるこいふものです。同じく短かい詩であつても、俳句はこいまでも俳句であり、短詩（短唱も同様）はこいまでも短詩です。

石くれと凍らめすくむ雪の鳴

水鳥に風の木華が降ることよ

遠鳴の聲雪泡が揺れ暮るる

圍ひ大根の鼠の齒あと佗しけれ  
土のぬくみ室の大根の黄な芽はも  
圍ひ室風が根深の香を吹きつ

— 十 六 日 —

雪がしんしん降つてをります、定山溪行きも思ひきつて、遽かに日高入りこきめました。昨日から迎へに來てゐてくれる吞洋君に使を馳せて、あたふたこ出かけました。

はろばろの雪原の果てに樽前山が煙りをひそめてをります。あの下に支笏湖が湛へらねてゐるのだこ思ふこ、曾て湖のほこりをめぐつたこいひが思ひ出されました。日高路には入るこ、枯柏が雪原の其處此處に影を落してゐるのが目につきました。

苫小牧で佐瑠太線に乗り替へです、下車してから羽織を車中に置き忘れたこいひを思ひ出して、またもや同行の諸君に餘分な心配をかけたのですが、間もなく手に戻つたのは仕合せでした。



日高は北門の樂園で幾んど雪を見ないといふことでしたが、浅いながらも雪にまぢられてをりました。餘程氣候が狂つて来たやうです。始めてアイヌを見かけました、つぎめて同化しようとしてゐるらしい敗殘民族の心根がいじらしく思はれました。枯柏君のメノコのロマンスは哀れにも興深く聞かれました。

小さな窮屈な列車はがたごたごた騒がしく揺れ合ひながら、茫々たる草原を海沿ひに走つてゆきます、雪は大分に少くなりました。折々鶉が玻璃窓をかすめては草原に影を落してゆきます。同行の人達は懸命に句をつくつてをります。

日が落ちがかつて、草原の姿が一しほ薄ら寒くなつて来ました。

### 野ゆく子に餘所なる冬日暮れにけり

もうこつぷり暮れ果てました、退ましい枯柏が巨人のやうに立ちはだかつて見えるのみです。水ほりの雪は消え消えに、牧馬が固まつてをりました。月代明りがほのかに流れてをります。

### 顔寄せて馬が暮れをり枯柏

佐瑠太の夜の眺めは、何んといふ寒いことでしたらうか。自動車に故障が出来たといふことで、がた馬車に身を委ねました。途中の旗亭で待ちあぐねた頃漸く自動車の人となりなつて門別に向つたのですが、本當に明日の自動車の旅が氣遣はれます。

聽壽衣君にこつても枯柏君にこつても門別は深いゆかりがあるといふことで、小人数ながらも極めて打ち解けたまざるがつくられました。吞洋君が雅號をかへたいといふのをきつかけに我れも我れもいふことで、吞洋君の竹史・桃村君の漁樵を始めそれぞれつけかへてやつたことでしたが、餘り似つかはしくないものは兎も角、大抵のものは呼び馴れたままで置きたいと思ひます。ニツクネームは違ひ、己れの雅號をいしむ心は、やがて己れの俳句を重んずる心になつてゆかうから。

十一月七日

門別を出かけるに、雪はこんこん降つて来ましたが、湯たんほのぬくみが脊までも通うて、自ら心も和んで来ました。漁樵君は如何にも洒脱な賑やかな人です。



牧馬がのそりのそり街道に出歩いてをります、雪に吹かれ立つ牧馬の姿は哀れさをそりま  
す、餌場のあたりは夥しい鴉が群めてをりました。こある濱邊の亂礁に紛れつつ鴨が群れて  
もをりました。雪に埋れた昆布小屋のかしぎさまも旅の心を惹いたここです。

鱈架の雪に鴉のひしめけり

浦河街道第一の峻難だこいふ百七曲りにかかりますこ、一臺の自動車がバンクしてをりまし  
た。ああ自分達のでなくてよかつたこ、しみじみ思つたここです。浦河に近づくに従ひ、皆の  
元氣は一段こ昂つて來ました、ウキスキーの酔ひも手傳つてはるましたものの。

洗ひざめの子の足袋に腫の澄みゆける

そとかくす輝の手を見のがさじ

湯婆ぐんと押しやりて心ぬくもりぬ

霜焼けの耳底に鳴る夜の木かな

雪は途中から霽れたのですが、句會への途上の月は、和やかな心にややまろらかに仰がれ  
ました。

かんかん照りつける電燈のもこに、眞つ正面へ据ゑられるここは、既に馴れきつてゐるこは  
いへ何もなく面はゆいものです。縦令行儀が悪いこいはれても、氣儘でゐたいこ思はぬここは  
ありません。

句柄は可成り古いやうに思はれましたが、二・三の若い人達にいいものを見出したここは心  
強くも覺えました。何んでも努めるここです。

泊り重ねて寒風の月仰がるる

— 十 八 日 —

昨日にひき替へて、今日の自動車の旅の寒いここ、全く身も心も凍れさうです。いひ合せた  
やうに皆が黙りこくつてをります。走れば走るほど寒いのだからたまりません。浦河の宿に竹  
史・草央子の兩君が残つた上、腹が痛いこいつて漁樵君が途中で降りて了つたので、寒さこ淋  
しさここもこも迫つて來るのです。それでも佐瑠太へ案外に早く着いて安心はしたので  
す。



苦小牧の宿では、他人水入らずに、三人が三人伸び伸び寝たことでした。さいつても明日の朝は枯柏君と別れねばなりません、また一層淋しくなります。君には半月の間随分厄介をかけた、學校の首尾が悪くはなからうか懸念はしながらも、旅先きの氣遣はしさに、無理から浦河まで往つてもらつたのでしたが……そして何も彼も躬に引き受けてやつてくれたばかりか、私の苦い言葉までも素直に聞いてくれたのでしたが……その君も明日は別れて了ふのです。伸び伸び寝ながらも、さまざま思ひ出が闇の眼をかすめては消え、かすめては消えるのです。

——十 九。日——

また札幌へ戻りました、逓友倶楽部の句會が何んさいふ無差別の絶對境を示してくれたことせう。さうです、藝術の世界は絶對平等です、局長も配達夫もありません、すぐれた俳句の前には唯だ頭のさがるばかりです。

旅心はなるる雪の月まるし

雪に住めば屋根の木影も頼まるる

——二 十 日——

聽壽衣君は用事の都合上、今夜發つこいふことで、私はいよいよ獨りぼつちになりました。札幌に別れる時、幾く度びも幾く度びも送り迎へをしてくれた郭公翁のにこやかな顔を見るに、涙がこぼれさうになりました。聽壽衣君には平生の心易立てから、随分つけつけ物を言つてゐたこゝが悔まれもしたのです。

さらば！ 札幌の人々！ 健康と藝術の上に祝福あれ！！

この雪の踏み消ゆるまで歩まんか

俱知安で、また枯柏君に逢ふこゝが出来ました。そして次の驛まで送つてもらひました。函館へ着く匂々、稻香・香苗・四白君等に迎へられてまた湯の川へまゐりました。新しい旅館（福井）だけに、檜の匂ひも、たぎら流るる湯の音も、いひ知れず快ろよい、これで凍れさへしなかつたらと思ふのでした。



二十一日は書きものの忙しさに暮れ早い思ひがされました。それでも湯につかる一ツ時、一ツ時は心が放たれてゆくのです。雪が解けるや否や咲き匂ふさいふ鈴蘭が偲ばれました。

—二十一日—

寒なぎの曇りに函館の大通りは雪の上は解けが見られました。

途中での夕餐が遅れたので、講演もそこそこに選句が終るまで直ぐ埠頭に向ひました。

見送つてくれた香苗君の瘦せた姿が寒むさうに甲板から見おろされました。

船はきしり出しました、二十日の間この私を恵んでくれた北門の自然と人に別れる時が来たのです。私は重ねてあの土を踏み、あの人々に接したいとは念ずるものの、明日を測り難い人間のいのちは、それがゆるされるかどうかもわかりません。私は遠ざかりゆく函館の燈火を見透かさずにはゐられなかつたのです。

船はそのつぎめに對つて闇へ闇へ突き進んでゆくのみです。私は聲を吞んで欄干を離れました。

おお、いつくしき夜の海！

—二十三日—

青森の埠頭には青湖君と淡谷君が来てゐてくれました。そして淺蟲の温泉で聯合句會を開きたいからこのこみでしたが、福岡へも盛岡へも既に日取りを打電して置いたこみでもあり、ならうこみなら二十六日の御大典當日は東京へ歸りたいとも思ひましたので、断りをいはねばならなかつたのです。せめて半日でもさいふのを重ねて断らねばならないこみを心苦しくも思ひました。

福岡驛に出迎へてくれた人々の中に十三象君を見出し得なかつたこみは淋しくも思はれました。古屋に着いてから木風君の話によるこみ、盛岡の句會が二十七日になつてゐるさいふので、早速二十五日にしてくれるやう電報を打つてもらひましたが、新聞社の催しであるだけ禿氏君が困るだらうとも思はれました。

郡の重立つた俳人の集りだけに、思ひの外賑やかなまざるがつくられました。不圖見るこみ、



後ろの床には私の自畫讚やら合作やらが掛けてありましたが、畫は素より書にしてもそのまづささいつたらないのです。それは丁度八年前でありましたが、始めて盛岡へ往つた時、書は達者だの畫もうまいのさしい氣な顔をして描きなぐつたその折りのものなのです、全く冷汗が流れます。取り外しよくれど頼んだが聽いてくれません、……三・五年たつてから今描いてゐるものを見たら、矢ッ張り拙くて見られまいと思ふに、これからは滅多に描くものでないに、しみじみ自分が省みられました。

はなればなれの鴨に粉雪の日が暮るる  
寄り寄りに水輪つくりて月の鴨

—二十五日—

朝飯が済むか済まぬかに、日取りの問題で芳清君がわざわざ盛岡から来てくれました。果して禿氏君が困つてゐるこのことでしたから、思ひきつて二十五日に岩手吟社の句會、二十七日に一般的の句會といふことにきめました。青森の人々には全く済まないことになつて了ひま

した。

一日揮毫に暮れました、昨夜も昨夜、冷汗を流した癖に、前々からの約束はいへ、いい氣なものです。

この地は戦國の英豪九戸氏の城地であるばかりか、津輕への復讐に一生を捧げた相馬大作の生地なのです。心の友の一人である春悠君は彼れの流れの末さいふここで、嚴君もさも彼れの遺物のくさぐさを見せてくれました。あの大刀、あの鉄杖、あの鉄砲、何んさいふ豪快な男でしたらうか。それにあの書風、あの文章の雄健さはまことに讚嘆すべきでありました。私等はいもつこ、もつこ修業しなくてはなりません。

夜に入つてからは續けざまの句作に皆を苦しめたことでしたが、さうかこの夜の努力と苦心を皆が皆忘れずに居られたいものです。

枯草のおどろに氷柱砕けたり

—二十五日—



十三象君に久し振りで逢ひたいと思ひましたが、病勢の昂進が氣遣はれたので、逢はずに發つて了りました。(その十三象君もさうさう三月六日に白玉樓中の人になつて了つたのです。)成る程、福岡は金城湯池です。一水僅かに西南へ通じてゐるのみの盆地です。九戸義實がよく半歳を守り得たのも故あるこゝこ思はれました。

汽車に乗つてからも、木風君の悠揚迫らざる態度、文泰君の事に慣れた言動、禾兆君の火のやうな熱心さなきが眼な先きを去來したこゝこです。土産に恵まれた蟹の化石は誇らしくも思ひました。

鶏どもが顔寄せてをり雪しづる

高桑の影蹴て雪を飛ぶ鴉

芳外庵に落ちつきました、いつもながらの細かい友情を有り難いこゝこに思ひました。

その夜の句會では、巧みに過ぎた句、堅い言葉の句なきがたまたま眼につきました。素直な言葉で素直に詠み出づるこゝこです。達人は凡人の謂ひであるこゝこを忘れてはなりません。

よう寝たる子よ布團尻押へやる

—二十六日—

すめ御子の佳き日をこの盛岡でほぎまつらうこゝこは思ひまうけぬこゝこでした。筆を執りながらも、彼方此方にあがる歡聲に我れ知らず心が躍るのでした。

凍て返る夜の街の殿くしさ、賑やかさ。化石人の押し行くが如き裸行列、狂ふが如く練り行く萬燈行列、その人牆を潜りつ抜けつ、民草の燃え立つ誠心に、そぞろ涙を誘はれたのです。

ああ、ほぎまつらでやは、ほぎまつらでやは。

ほぎあぐる諸聲雪を光らせつ

—二十七日—

秀清閣の大會は思ひの外少数ではありましたものの、その大半が遠方の人々であつたこゝこは心嬉しく思はれました。

炎天君の若々しさ、研堂博士の逞ましき、黙々としてゐる虎獅狼君も、温順そのもののやう



な芳清君も、てきはきこやつて退ける子成君も、私にこつては忘れ難い人々です。櫻石君を始め若い人々の努力振りは頼母しいこころです。

氷上の積糞に通ふ鼠かな

—二十八日—

大慈寺の墓門に眠る原一山居士も、俳人たるこころに於ては、私等の友であつたのです、その巧拙は倍て措いて。

暮參を終へて見やる杉叢の風音が雪を誘うて暮れ初めました。

これで北海、東北四週の旅も終るのであります。その始終、自然に人に恵まれたこころが、今更に願みられます。(草堂に戻りしその夕べに)

枯萩の空枝のかげの暮れし門

## 浴 泉 抄

菜の花が金泥を刷き散らしてゐる、青麥が綠青を縦横に塗りつぶしてゐる、散り端の梅は銀泥の錆色も見よう、臍脂をふくんだ桃の蒼も旅の眼にはればれしい、寒いこころも有り難い春光ではある。雲雀が鳴かないこころも、蝶が飛ばないこころも、三月越しの病餘の身に心に、如何ばかり親しい自然のすがたであらうぞ。

妻はじつと寝たままである、それでも血色はわるくない、このまま無事に古奈へ着いて呉ればと思ふ。淵博士は、安らげな妻のさまに、窓外を眺めては句を作つてゐる。

平塚で飛鴻に逢ふ、わざわざ二人を見送つてくれたのだ、そして來月の三・四日頃に見舞ひながら來るといふ。いつでも素直な男である。

大磯も過ぎた、國府津も過ぎた。箱根へさしかかつて洪水のあまが偲ばれる。雪深い大富士が、よきこ眼の前に浮ぶ。こころを通る時はいつでも「影富士の消ゆくさびしさ花芒」の一句



を思ひ出す。

山腹の大土手が焼けてゐる、焔の舌がめらめらと走つてゐる。煙りのかげから女の子がのそりこ出る。

旅の心は放たれた心である、淵子の對手をしながら病後始めて麥酒に咽喉を潤す。富士を眞向きに心が展ける。雪の光り、常磐木の色、裾野は野火の煙りが渦巻いて無迅に焼け擴がつてゐる。すさまじく楽しい眺めさもないほう。

兀として富士は寒むげよ暮の鴨

亞浪

春の雲お山の雪にかけしけり

淵子

いよいよ三島へ着いた、白石館の番頭に迎へられて駿豆線に乗る。

淵子は眠つてゐる、妻は何んともないさいふ。

長岡驛で吐き出された三人は、待つてゐた自動車で日暮れ間近かに白石館の客こなつた。

「奥さん、痛みませんか……先生、御気分は何うですか……。」と淵子が眉を寄せて問ふ。

僕は何んともない、妻は痛くはないさいふ。三人が三人、ほつとして長火鉢の側に坐る。や

れよかつたと思ふ心の緩みが、かすかな疲れと、淡い淋しさを誘つて、放たれた心の底に、ちらり窓越しの夕かげが流れ入る。旅はやつぱり旅である、まして病人を抱へた病餘の旅ではないか。

繪葉書でも見、麒麟草からも聞いてゐる野天風呂へ二階の梯子段をのぼつてゆく。

成る程、すばらしいものだ。二階の部屋わき、伸びさがつた山の一角を削つて、四間に五間もあらう楕圓の大湯壺を据ゑ込んである。大松が二本、こんもりと翼を擴げて半天を蔽ひ、碧玲瓏の湯底には櫛の枯葉が俗緒を鏤めて、夕日のかすが、さらさらと波の綾を刻んでゐる。

「やあ、こりやあ素的だ。」とこいひながら淵子はもう裸になつてゐる。裸馴れた淵子は、それ程立派な裸身なのである。しみじみ羨ましいここに思ふ。

暫らく身を心をやすめてから、あたり碧瑠璃をみだして貧弱なからだを沈める。身を沈めながら脚を伸ばして櫛の枯葉を掬ひあげて見る。松の枯葉がはららと降つて眼な先に浮ぶ。松の葉越しの夕空は澄み切つて腦天に寒さを感じる。



潤子は子供のやうに出たり入つたりして、なかなか上らうとはしない。

「先生、二つ三つ出来ました……實際いいところだな。」と、にこにこしながら身を浮かせる。眼下、狩野川を包んだ竹叢が、何處までも靡いてゆく、その眞向ふの山脊は夕日の影を豊かに浴びて、巨大な馬背のやうでもある。暢びやかなすがた、暢びやかな心。

夕飯が済んでから、潤子にあらこちへの繪葉書便りを二・三十本書いてもらふ。旅へ出たその日にかうした葉書を出すなとは、今まで曾てないことである。それも潤子がわざわざ來てくれたからだ。軍醫學校の教官をやめて幾分暇になつたさはいへ、心から私達を思つてくれる優しい心持を頼母しいこに思ふ。書き終るまで、潤子は直ぐに野天風呂である。飲み残りの麥酒を持つてつてやる。

「先生、済みません……夜は夜でいいですよ、よささうなのが二つばかり出来ました。」といふ。

何時までも出て來ないので往つて見るに、湯壺めぐりのタタキの上に皮を剥がれた藁のやう

に這ひつくばつて、相變らず一心に句を作つてゐる。

今朝の寒さは一と通りでなかつたが、伊豆の夜もなかなか寒い。一面の湯氣が松の闇をおぼろにぼかして、銀河の空へ流れてゐるではないか。潤子は寒褌で鍛ひあげてゐるだけに左程に寒くはないと見える。(大正十五年三月十六日)

銀河降るいで湯の山の春遅き

潤子

松かけもおぼろおぼろと月の出湯

同

安らかな第一夜の眠りが覺めた時は、潤子は最う野天風呂には入つて來たといふ。そして朝飯が済むが早い、またぞろ野天風呂である。

「奥さんが痛なくなつて本當に仕合せでしたが、その代り僕は何に來たか譯がわからないことになつちまいしましたなあ、唯だ野天風呂に這入りに來たやうなもんですなあ……金子君に吩咐つて來た注射だけでもやつてきませう。」といふことであつたが、その必要もなかつたので、急ぎ立てて歸りの仕度をさせる。



「こんなものは面倒ですから……。」といひながらカラーもネクタイもポケットに突っ込んで自動車の人となった潤子のあるがままの姿は可笑しくもあり尊くもある。鴨が鳴いた、鶴も鳴いた。(同十七日)

春寒し曉けの竹山鴨鳴いて

亞浪

二

さうしたころか、今日は朝から痛いといつて、妻が顔をしかめてゐる。内湯への行き遣りにも腰を抑へては片脚をひきずる。そして寝てゐても妙に冴えない顔をしてゐる。

「注射をやめたせいでせうか。潤子さんにやつて貰つて置けばよかつた。」と不安の瞳を寄せゐる。

「うむ、そいつあ弱つたな。いよいよ逆戻りか、こんな處へ來ちあ、さうにも埒があかない……。」暗い寒さが俄に迫る。

「こんなに寒いから、そのせいかも知れないが……。」

「さうしても痛くて仕様がなけりやあ、金子君に電報を打つんだ。」

「持つて來た鹽酸シノメンでも飲まうかしら、胃がわるくなるからつて金子さんにいはれたが……。」

「む、なんしろ寒いからな……かう寒くつちやたまらない。伊豆は暖かいなんて、裕吉この騒ぎかい。」

寒さで不安さがつちやになつて氣がいら立つ。ところへ郵便を出しに往つた番頭の小林君が歸り返事に來たので、カステラを勧めながら其の話をすること、

「え、一たんぼうじで、それから二・三日経つて段々よくなるんです。湯が効く證據です。」と、鼻を反らしてけろりとする。

晝過ぎ連れ立つて内湯へつかつてゐるところへ、御飯たきの小母さんが來て、

「わたしやあ淺草なんですがね、地震でひどい目に遭ひましてね、それから子供を連れて來て居りますんですよ。一んちね、暇さへあれば七度びでも八度びでもはいりますんですよ、こんなに肥りましたね。」といふやうなところから話が妻の病氣に延びて、



「はあ、はあさうですか、坐骨神経痛ですか、お痛いさうですね。え、さうですよ、一たんぼうじてそれから段々によくなるんですよ。湯が効くさうなんですよ。」といふ。まったく獨りで呑み込みきつてゐる。

そら頼みのやうでも、二人が二人、ぼうじて、ぼうじていふので、さうやら少しは心が落ちついて来た。一時はさうなることか、さうしたらいいのか、本當に途方に暮れたのであつた。その暗い、そして寒い氣持ちつたら、さても今夜は眠れまいさまで思つた程である。それにつけても旅では病氣をしたくないものである。

いくらか安心はついたが、さうにも寒いので、膝掛を引つかぶつて、寝ころびながら選句をしてゐるさ、女中の高公が、

「御免ください、お連れさまです。」といふ存外しほらしい聲に續いて、

「先生、僕です。」さ、意外にも種芽であつた。

「さうしたんだ、だしぬけに……。」

「え、少しお話があつて……さうですか、奥さんは。」

「む、今日は痛いッてんで困つてたんだ……僕あいがね、ゆつくり出来るんか。」

「いえ、明日の朝までに歸らなきやなりませんから……。」

それから碌々湯にもはいらず、夕飯が済むさ、夜行列車を目あてに、あたふたさ歸つて了つた。いつも氣忙しい男であるが、それでも友達のために心配してやるやうになつたのは、今までの苦勞が役立つたさもいへれば、頼母しくなつたさもいへる。まして此處までは容易なささではないのに、本當によく來てくれた。(同十八日)

夢さめて湯の香もあらぬ寒さかな

亞浪

三

ひきつづいての寒いささ、天氣の逆戻りに、妻の病氣の逆戻り、この上自分が……さ思ふさ、尙ほさら寒くもなれば暗くもなる。それにぼつぼつ雨も降り出して來た。それでもあちさちの新聞の選句は大分かたづいて了つたが、それも一つは先きに大切な仕事が重なつてゐるさ、出かけようにも寒いさためでもあつた。



こ、女中のおよつちやんが、お連れ様ですこいつて案内して来た客を見たが、誰れであつたか一寸胸に浮ばない。黒田ですこ名乗られて、あ、猿人君かこいつたやうな譯だつたが、突然でもあり意外のよろこびでもあつた。そして試験休みになつたので、歸省の途すがらお見舞ひに寄つたこのこころであつた。神経質らしいうぶな一本氣なこころに若う人らしい詩人らしい天分の閃きを見せてゐる。

持つて来てくれた堤人形の西行が早速床の間に納まつた、あの山がなかつたら富士が見えようものをこ、月並みな取り合せが頭に浮ぶ。東京は雪が降つてゐるさうだ、御殿場あたりは三・四寸も積つてゐたこのこころ、それでは寒い筈でもある。

翌朝は雨もあがつた、「僕の行く方はさつちですな。」こいつて皆にはほ笑まれながらすたすたご門口を出て往つた。(同二十日)

麥生越えて湯氣立つ家とをみないふ 猿人  
はるかな丘の残り蜜柑に夕日さす 同

四

野天風呂のほごりに薺がほつんぞ咲いてゐた。あの小さい白い、いたいけの花が、したたかに湯煙りの影を浴びて。寒いながらに春である。裏の竹山で鶯が鳴く。さくさく、さくさくこ爺やが枯萱を刈つてゐる。(同廿二日)

湯けぶりの影の日向のなづなかな 亞浪  
花蔭の崖したたりに鳴く鶉 同  
鶯や湯壺に松葉こぼれつつ 同

五

鶯がしきりに日和鳴きをする、繪葉書を買ひに出た序でに、湯谷神社へ登つて見る。裏手から横手正面へかけて、石伐り跡の岩壁が、深く暗くさながらの殿作りになつてゐる。滴りを深く湛へて大蛇の棲みさうなこころもある。もし形を整へたら名蹟にならうものを。この一事がすでにこの土地の人達の一致を缺く個的な心のさまを語つてもゐる。



櫻の蕾はぼつぼつ口紅をふくんでゐる。椿の落花は眞紅をみだしてたましい。狩野川の竹叢はうねうね靡いて、風が出たらしい。早く暖かになつてくれればいいなと思ふ。(同廿三日)

見おろせば辛夷ばかりが咲く日向 亞浪

山の椿小鳥が二つかくれたり 同

六

きのふ来た鴻村を誘つて、最明寺から長岡へゆく。鴻村は本當に達者さうになつた、以前よりは血色が違ふ、腸胃の工合ひもいいといふ、これなら最う大丈夫だ。當の鴻村も、さうかいといつて嬉しさうでもある。

最明寺は何んこいふ見すばらしさだらう、萱葺きのそれもがさになつてゐる。禪宗であるべき筈のが、日蓮大菩薩の石碑があちこちにあるのを見るに、いつの世にか改宗したものと見える。庫裡へ廻つて繪葉書を求める。一叢の石楠が三つ四つ蕾をつけてゐたのは懐しく見られた。水仙は黄いろく、常夏は紅い。

お堂裏へ廻つて時頼の墓に詣でる、小登りのころ路で下駄の足をこられさうだ、豆腐が石こいふ石、岩こいふ岩にひらみついてゐる。ささやかな輪塔が、時頼が長へに眠つてゐるころだ。それでも石の玉垣をめぐるして、こんもりとした常緑樹が青天井を蔽うてゐる。修理のためにこいふ賽銭箱での寄捨は何んこいふみじめさであらう。

勤儉力行、民本的に善政を念じた一代の政治家時頼の塋墳ではないか。そして彼は弘安の國難を擔當して克く國運を泰からしめた相模太郎の父ではないか。村では出来なかつたら、郡でも、縣でも、保護の道を講じたらよかりさうなものなのに。これでは涙がこぼれる。

鴨がびいびい鳴く、寒い叫びではある。

長岡はすつかり湯町式に軒を並べてゐる、店屋も相當大ききさうなのがある。二十年近い協同の力がここに至らしめたものであらう。こいつて近頃のやうに内湯ばかりになつては温泉情調は滅多に味ふべくもない。あの共同風呂——大湯に浸つて東人も西人も、南娘も北嬢も唄ひつ語りつした世相の一面、子供の時のありすがたが懐しい思ひ出さなつて了つた。



何處へ往つても例にもれない何伯・何子・何々の別荘が微笑をそそる。

案内の小林君が山越えに戻りませうといふがままに、町の突き當りを右に折れて雜木山にかかる。南受けの山峽で、しかも丹前出で立ちこいふのであるから、一步一步に汗が滲んで息がはずむ。

頂きの展望こいつたらない、反射爐も向ひの山下に突つ立つてゐる、葦山城趾も、蛭の小島も直ぐ其處だ。青麥畑が縦に横に、狩野川がうねうね貫いてゐるのが暢びやかに見える。脚もこには董がひそかに笑つてゐる、蒲公英が高らかに笑つてゐる。

彌勒堂を右手に見ながら、すたすた下る。こんもりとした杉の谷間に椎茸の茸木が組んである、往つて見るこぶつ指頭大のが噴き出してゐる。大ききうなのを失敬して門徒寺の前に出る。もう牡丹の蕾が無花果ほごになつてゐるではないか。

白木蓮が霜痛みの縁こつて薺々咲き匂つてゐる、古奈の町は人通りも長閑である。湯谷神社へ登る、鴻村がのそりこして首を伸ばしながら麥畑を見下ろしてゐる、句でも考へてゐるの

であらう。

山淋し野ひとところの麥作り

鴻村

春の霜木蓮晝をくもりけり

亞浪

宿に戻つての鴻村は、野天風呂にはいるこいこい、句を作るこいに餘念もない。(同廿五日)

朝の鴉はげし竹山風満ちて

鴻村

炭の香や春あかつきの風の鴉

同

松の音しきりに冷ゆる春の夕

同

野天風呂檜の枯葉の月夜なり

同

春の日の竹山嵐遠くなる

同

月や春風ぎの湯煙り空に消ゆ

同

竹山嵐雨の如寒き温泉の泊り

同

松の葉かけいみじき朝の火鉢かな

亞浪



竹山の嵐の月の春やあらぬ

亞浪

七

來てから最う十二日になる、妻もいくらか快い方に向いたやうだが、斯ういつまでも寒くてはたまらない。

豫期しない一鳳君が、東京の戻りださいつて立ち寄る。東京は復た雪であつたさうだ。まだ温泉の味ひは知らぬさいふこゝであつたが、早速、野天風呂に飛び込んで、これはいいわい、これはいいわいさ悦に入る。

野天湯に遠く影して馬酔木咲く 一鳳

夕方、麒麟が百枝をつれてやつて來た。來るが早いか、野天風呂は何處ですか、さいふ工合に、澗手の吹聴がなかなか響いてゐるらしい。

夜は六人が卓を圍んで旅さしもない賑やかな夕餉をさる。

二階の婆子が二人、晝から藝妓を呼んでの皺のばしが、夜に入つてもやみさうになく、麒麟

が天井を睨めては、三島節を一つ聞かなくてはなごき、涎を垂らしさうにする。それも旅、これも旅の心である。二階の婆子が酔つぱらつての揚句、内湯でぶくぶくのお念佛を來たなごは、如何に旅さいつても、村の衆へは内しよ、内しよ。(同廿七日)

さうさうと竹は夜を鳴る春山家 亞浪

八

鴻村に一鳳君が歸るさいひ、帳場の杉山君が稚兒が淵へ御案内しませうさいふ。連立つて門を出る。町の三叉路で東に南へ別れて最明寺へ向ふ。

「時頼つて? あ、あの鉢の木のあの墓ですか。」麒麟はやつぱり物理學者である。何處へ往つても鶴が鳴いてゐる。

鶴は寒し椿が落ちたまり 亞浪

長岡の町をぬけて、大黒堂に詣づる、何處にも一つ位はある左甚五郎の作さかいふ木彫の龍が拜殿の欄間にくすぶつてゐる。



それよりも北の山間ひに屹ま半身を示現する靈山富士の方が何んぼう有り難く望まれたらうか。

石器の話、石棺の話聞きながら、小牧を廻つて稚兒が淵へ出る。此處ばかりは凝塊岩の大岩塊につつまれて、溶かした瑠璃を深々ま湛へてゐる、下流から見上げた葛城の山容もここしいのに、なぜか、繪葉書の寫眞は平凡な寫眞ばかりを撮つてゐる。

茶店川由の縁先きに腰をおろす、ま獵裝甲斐々々しい奥平伯のま一黨が空びくを提げてやつて来る。そして張替へた店の障子に御休所、酒もあり升なんま墨黒々まなぐりつけて、ここにも旅の心、いや旅の恥が書き捨てられる。寒くても春は春である。

河原鶯鳴いて川水青くなる

亞浪

「今日は捕れません、が、兎も角。」まいつて川由の主人が舟を廻してくれる。渡し綱を斜めに切つて向う岸へ着く。

「さうも今日は駄目です、影も形も見えません。」ま川由の主人がいふ。

「天城の雪解で水が冷たいからだ。」ま應ずる。漕ぎ戻しての中流あたり、渡しに乗つた藝妓

らしいのが、

「捕れましたかあ……。」まわめく。鶯が河原藪で音を張る。茶店前の梅檀の實は粒々に黄いろく、藪中の芽柳はふさふさま黄いろい。

水の青さの魚も見えなく猫柳

麒叟

摘草や牛が吹かるる藪のかけ

同

歸つて見るま、百枝は宿の子供達ま遊び廻つてゐるが、「ちいちゃん、こんなに土筆をまつて来たの。」ま晴れ晴れしい。百枝の誘ふがまままに、横手の廣場へ出て土筆を摘む。あるは、あるは、すすすすま枯草の中に。(同廿八日)

牛のさがのそりと藪の梅散りし

亞浪

大湯壺湯氣も見えなく日のぬくし

麒叟

九

押しつまつての三十日の夜に、ひよつこり鳥塚の親爺さんが石楠の校正を持つて来たのも意



外さへば意外であつたが、三十一日の夜には遅くも来る筈の晩昇がさうさう来ないので、豊橋へ歸つたものと思つてゐた一日の朝、またひよつこり来たのも意外の一つである。

晩昇は、弟の急病に馳せて、横濱へ往つたのだが、快方に向いたので歸つて来たのださういふ。そして、ゆふべは電車がなくなつて了つたので三島へ泊つて了つたのださういふ。誰も彼もが私達を氣遣つてくれるのは有り難いことである。今朝から俄かに暖くなつたので、妻も大分工合がいいさうだ。

焼くる焼くる山火の空の遅き月

亞浪

遠山火湯けぶり松をかすめゐる

同

野天風呂を出てから、晩昇を連れて最明寺から長岡、長岡から山越しに彌勒堂・湯谷神社を巡つて戻る。何處の櫻も三分の誇りを見せてゐた。歸れば床の花瓶にも山櫻が挿されてある。ああ春だ、本當の春だ。

山櫻澄みて蝶々空をゆく

亞浪

夜半の電報、令弟復もや危篤の飛電がなかつたら、縦し丁子は来なくとも、晩昇は三・四日

まで泊つたことであらうに。(四月一日)

湯氣のぼるうしろの山の小囁り

晩昇

岩壁の滴りに澄む山の花

同

石段の苔からからな榎咲いて

同

山おぼる篁の風鳴り移る

同

春の星親し山湯の松が鳴り

同

朝の日や湯玉つけたる莖草

亞浪

一〇

朝から大雨が降つてゐる、今日は誰れ彼れが来るさういふのに。そして降れば何時でも寒い。それに風も強くなつて、雲の行きかひもすさまじい、旅の泊りの雨ほさ心細いものはない。郵便が届いて、登代子は女學校へ入學の準備で来られないさうだったが、さて誰れも誰れも



が来るこゝやら。

こ、逸早く種茅が復たもだしぬけにやつて来て、林火も飛鴻も来る筈だこいふ。

次いで、明日かも知れないと思つてゐた静岡の鮫浪が見えて、可なり賑やかになつて来た。

鮫浪はいつでもおこなし、落ちついた物腰なり、控へ目の話振りなり、眞誠一貫こでもいはうか。

人聲がすれば、自動車に着けば、それ飛鴻だ林火だ三郎だこ心はずませたのであつたが、夕暮れ近い霧の中を三郎唯だ一人やつて来たばかりであつた。

雨こはいつでも、明日の日曜を控へて、なかなか客がこみ合ふらしい。雨音まじりに客の楚音、女中の楚音が廊下に響く。

雨の小歌みを裏山に登る、山にも野にも雨霧が漂つて、蓬々とした萱立ちに山櫻が二・三本淋しい。

篁が霧ふ日暮れの春の鴨 亞浪

雨が降る降る鴨が鳴く鳴く山の春 同

雲がゆく旅の日暮れの山櫻 同

山蛙啼きつ菫に雨降れる 鮫浪

春雨の湯に山籟を聴くひとり 同

湯けぶりの散りゆく雨の山櫻 同

種茅はまだ一句も出来ないこいふ。十二時近い頃、筆を擱いて寝る。雨音はまたはげしい。

(同三日)

出迎へられし道の邊の櫻蕾みつ 種茅

町をはなるる裏山の芽木の風の吹く 同

ぼさぼさと竹の葉ゆらぐ春の雨 木公

一一

種茅が未明に發つてゆく、雨は次第にあがつて来た。皆で長岡へ往つて見るこゝにして自動



車を待つてゐるに、日がちかちか硝子窓にさす、いい鹽梅である。

古奈も長岡も可なりに混雜して見えた。富士は名残りの雨雲に包まれて見えない、天城一帯は春雪斑らの装々を深く刻んでゐる。これでは寒い筈である。

例により最明寺・湯谷神社を案内して戻る、あたり満開の花は褪せて、湯宿の窓越しに雛壇が覗かれた。

雪霞澄める遅日の天城嶺呂

麩浪

山の松澄みて遅日の窓近き

同

煙草すつ朽葉が中の落椿

同

枯れ木挽く音春山の鴨しきり

同

常磐葉の降る山の湯にしづみゐる

同

三郎が歸つてから、二階へ引き移る。二階へ移れるまでに妻の快くなつて來たのが何よりうれしい。麩浪が歸るにいふのを無理にひきこめて枕を並べて寝る、靜かな一夜ではある。(同

四日)

人形はまじまじとして瓶の桃

亞浪

湯の宿の雛に旅寝の寒かりし

同

一一一

島木赤彦氏死去、こいふ新聞の見出しは病餘の旅の身に如何ばかり強い衝動を受けたこいであらう。

朝餉のあごの苦者を味はうてゐる時であつた、寒いながらに窓を明けて、湯玉を綴つた葦のあえかな姿を見るになく見てゐるに、番頭が新聞を持つて來てくれた。何時も通り海外電報から二面・三面と見てゆくに、さうした見出しにはつミ腫を打たれたのである。

神経痛に餘病を併發したこいふこいふであつたが、胸の病ではなかつたらうか。水穂氏もさうであるが、赤彦氏も同じやうな病氣があるに聞いたこいふがある。こいつて水穂氏は細く長いが、赤彦氏は圓く太い。細い人ミ圓い人、それだけ一方はこいふこいふしくもあれば、他方はおつ



さりしてゐる。そこに同じ歌の道を歩きながらも、右も左へ別れ別れになつて了つたやうの隔たりが出来たのもあらう。

僕よりはたしか四つか五つは年上であつたらうが、僕は違つて子供も相當に持たれた筈であり、あゝに残された人々の悲しみも思ひやられる。弱さうな者が生きてゐて、丈夫さうな者が死んでゆくさいふのも、さだめはいへ、測り難いさだめではある。

赤彦氏さいふも、いつでも思ひ出すのは、「椿のかげ女音なく來りけり白き蒲團をほしにけるかも」さいふ歌である。これも故人になつた乙字氏が、この歌を無遠慮にこき下ろしたこゝがあつたが、その當時、僕は、少し感覺的であり深みは乏しいが、温みもあり潤ひもあり、さう一概にくさしたものでない、乙字氏の智的な批判に不服であつたこゝを今でもおぼろ氣ながら覚えてゐる。水穂氏の合著で、しかも其の第一歌集でもある『山上湖上』も惠まれたのであつたが、これに就いては幾んご頭に残つてゐるものがない。それよりも赤彦氏いへば、あの圓いからだと共に、いつでもこの歌が浮びあがる。丁度、茂吉君いへば、いつでも「赤彦一本の道さほりたりたまきはる我が命なりけり」さいふ歌の思ひ出されるやうに、深く印

象づけられてゐる爲めでもあらうか。

手紙の往復は何回もあつたであらうが、逢つたのは、あゝにもさきにも、下六番町の佐々木の二階で一度逢つただけである。短冊に歌を二・三枚書いてもらつて、僕も二・三枚俳句を書いて残したのであつたが、あのまづい字のあの短冊が今はさうなつたこゝであらうか。僕の短冊にはいつも、

雲くたる岩山あひの粟畑にあはの穂むる人ひとり居り

冬木の枝のわかれの猶見ゆるゆふ空を仰ぎ歩みを急かす

さいふ二首がはさまれてある。それも、これからはまたさ得難い形見になつて了つたのだ。萬葉派の歌人にして、萬葉の研究者にして惜しまずにはゐられない。茂吉君や百穂畫伯はさうに力を落したこゝであらうぞ。(三月念八)

椿空し竹山をゆく風の音

亞浪



歌人としての赤彦氏の永眠に就ても思ひ出されるのは、俳人としての鳴雪翁の永逝である。舊臘、翁が重態の噂を聞いて、取り敢へず見舞ひの品をお贈りしたまま、親しく御見舞ひの暇がなく、妻の病臥に踵いで、自分も亦病床に就いて了つたので、翁の臨終にも葬儀にも會する。この出来なかつたのは、不本意でもあり心残りにも思つてゐる。

翁は元來行き道を異にしてゐるため、屢次相逢ふ機會もなく、お互ひの消息も極めて稀れではあつたが、明治卅七年十月念七、始めて常盤會寄宿舎にお訪ねして以來、續いて一兩度お目にかかつた事があり、その後南柯の贊助時代には大概月に一度位は會談の機を得て、例の俳句論や哲學論に辯殺されたのであつた。けれども私が心から俳句を求めて甦るに及び、翁の二元的な俳句觀、趣味に遊ぶ耽美的な行き方を非とするに共に、ふつつり交渉が絶えて了つた。のみならず老來ますます壯なる趣味的俳句論の純正なる俳句を毒するの甚だしきを思つて、敢然論難した。こゝすら一再に止まらない。そして明治俳壇に於ける翁の功程を思ひ、その晩年を全からしめたい念慮よりして、ひたすら翁の高踏的態度を望んでやまなかつたのである。全く翁の老健は賀すべきであつたが、その俳句論の餘弊には堪へなかつた。管に堪へなかつたば

かりでなく、翁のためにも一種の悲壯事といはねばならなかつた。殊に翁のさうした氣風に乗じて、樞大王に擔ぎ廻す有象無象の心事を厭はしく思つたのである。

こはいへ、翁の古武士的なすぐれた人格は嶄然俳壇の一方に聳立してゐたのである。誰々誰誰の陰事秘事眼を蔽はしむる現俳壇に於いて、あの鐵石にも等しい一徹な道義の念は眞に敬仰すべきであつた。

昨三月、私等夫妻のために、それも久しく疎遠になつてゐた私等のために、親戚への弔問もさし措かれて、親しく老體を運ばれ、

#### 夫夫たり婦婦たり二十五年の春

こいふ一句を贈られた上、涯りなく温かい祝辭までも惠まれた。こいふこは、眞に有り難いことであり、其處にまた翁が道を道とし義を義として過らざる面目が窺はれて尊くも思はれたのである。

妻の自由が利くやうにでもなつたら、せめて墓參なりこして來よう。(同念九)

鴨の聲寒き思ひの暮れにけり

亞浪



五日になつた、静堂がまた突然に訪ねてくれた。令嬢の女學校入りに嘘をついてまで来てくれたこのこみである。早速野天風呂へは入つて来て、「今まで銃獵に來た時は修善寺、鮎漁に來れば長岡泊りきめてゐるたが、これはいいこみです。」と、さつかり寛ぎながら、「奥さんも御一所に寝られて仕合せでしたよ。先生だけだつたら、それこそ一層御難儀でしたらう。」など、私が如何にもやかまし尾であるやうな皮肉を飛ばして、てらてらな額の肉をびくびくさせる。甍浪が昨日歸つた話をするこ、

「さうですか、來るやうなこみをいつてましたが……甍浪君は實に立派な人です、句も實際しつかりしてますな。」と心からの敬意を表する。

さうかうするうちに飛鴻が平塚からやつて來て、夕餉はまた旅しもない賑やかなまごゐになつた。二人は初對面だけに初めのうちは神妙な言葉づかひをしてゐるたが、やがて一つ心に溶け合つて、

「そ、そうです、このおまつつあん、なかなかやかましいが、人懐つこいですが、アハハハハ……。」と飛鴻がいふ。

「それだから僕は、奥さんも一所に病氣をされてよかつたこいふんだ。」と静堂が應ずる。

「さいつも、こいつも兵法を心得てゐるな。これから少し選句を辛くしてやるぞ。」で皆が皆笑ひこける。

山の湯宿の宵はしんしん更けていつた。(四月五日)

山越えて青き空見し遅日かな(車中) 飛鴻

山の湯の日向親しき花菫 同

篁の夕日吹かるる花曇り 同

夜心となりて山風暖かし 同

湯の山の春日は落つる鴨の聲 静堂

義足一つ布團に並ぶ春寒さ 同



飛鴻が晝頃歸るこいふ、そして是非平塚の大會に来ていただきたいこいふ。妻もさうしてあげなさいこいふ。まさか平塚まで往つて戻るわけにはゆかない。ゆくますれば十一日限り引き上げる外はないが、それまでに妻が快くなるか、用事が形づくかが問題である。飛鴻はそのお使ひながら來たわけですからこせがむので、成る可くさうしようこいふこいにして鼻がつく。

山の湯の春曉の花に覺めぬたり

靜堂

朝飯が済んでから、せめて最明寺だけでも觀てゆくがよからうと勸めて、三人ぼつぼつ連れ立つ。天城が雪を見せてゐるせいでもあらう、こかく山かげはうすら寒い。

さりぎしの滴りに咲く山葶

飛鴻

人通ふ道もせ寒き山櫻

同

湯の神の賽者もなくて榎の花

同

竹は聲なし糸櫻ふりがかる

靜堂

晝過ぎ飛鴻は義足をぎしつかせながら歸つて往つた。脚のここも彼女のここも今ははかなみも悔みもしないだけに、可哀さうに思はれる。(同六日)

靜堂は静岡縣きつての素封家でもあり、醫師であつて醫師をしない町長でもあり、子澤山の強情者でもあるが、俳句は月並から脱化したばかりの雛鳥の負けず嫌ひだけに、懸命に作つては見てくれ見えてくれこいふ。理窟はいつても立てるべき者は立ててゐるこころに其の面目が躍如こしてゐる。私の同窓川又圭水ミ肝膽相照らしてゐるこいふのも淺からぬ資縁こいはねばならない。世間の子供が母よ母よこ母を追ふのがいまましいこいつて、うんこ子供を可愛がつてやるので今は母こもいはないこいつてゐる子供らしい親心にも、其の性情が汲めて微笑まれましたのである。

鶯の聲竹林の朝澄みす

靜堂

湯苔の青み頬白が曉け鳴きす

同



その静堂も晝前に歸つて了つた。静かな山の湯宿である。(同七日)

山の湯のほがらほがらと鳴く青鷗 亞浪

鷺の遠くなりたる山の晝 同

春寒し松の空なる天の川 同

蝶々がゆく常磐木の夕かげり 同

一七

宿の老翁が俳句を懸命にやり出した、主婦の和歌女さんも番頭の木公君も作つて来ては見える。白石翁が来ては佛像の話やらコレラの話やら家の内輪話やらそれこれ隔ての垣がない。和歌女さんも時折りやつて来ては、涙ながらに雄々しい心の戦ひを打ち明ける。私もしても妻も少しも餘所事ならず聞かれもしたのであつたが、そろそろ歸り仕度をせねばならなくなつた。少し居て残りの仕事を形づけたいとも思つたが、飛鴻を始め私をひたすらに待つてゐる同友の心持ちに思ひ及べば、さうも出来ない。やつぱり旅は慌しい。

こいつて聞かれるままに、俳句の話、歌の話に湯に入るこどもも忘れた一つ時もあつたのである。それだけ俳句は私のいのちでもある。(同九日)

一八

早いものである。寒い寒いこいつてゐるうちに四週もいつか過ぎて了つた。僕はもう大丈夫なからだを取返し得たものの、妻はまだチクチク痛いこいつてゐる。さればこいつて平塚へは電報も打つて了つた。妻も歸心に囚はれてゐる。仕事も大半出来上つた。今日を名残りに野天風呂へも二度は入つた。さうだ、歸らう歸らう、歸つてぼつぼつ仕事を運ばう。こいつて、歸りは佗しい、また何時來られるこもやら。明日こいはず、今日唯今を測り難い人間の生死である。この松もこの通草もしんみり見直さずにはゐられなかつた。鶉が鳴く鶉が鳴く。

白石翁をはじめ御飯炊きの小母さんにまでも送られて自動車に身を委ねた、和歌女さんは子供達二人を連れて女中こ番頭こ一處に停車場まで見送つてくれた。何處からか櫻の落片がひらひらこ車窓をかすめる。さらばよ人々。(同十一日)



わびしさの通草はひとり咲いてゐる 亞浪  
花松の夜々は湯けぶり凝りもせめ 同

### 滿鮮旅上抄

金剛の探勝を終へて京城の客舎に歸つたその翌朝（昭和三年五月念八）のこゝ、測らざりき、淺間山麓の郷家の老父危篤の飛電に接して、倉皇歸來、日夜こんこんと眠る枕頭に侍する。こゝ四日夜、刻々に枯れゆくその命を見入りては、曾て「死ぬものは死にゆくつつじ燃えてをり」を觀じ去つた躬ではあるものの、やはりこゝまでも人間である私にして、なかなか心に靜かなる暇もなく、三句に近い滿鮮の旅路の句稿も書き散らしのままこゝなつてゐる。さりこて己れのつこめを省みれば、このままやむべきではない、敢てその一部をこゝに録して、推敲はこれを他日に期する。

いのちかかるる父の寢息の明易く

六月三日夜小諸の郷家にて



五月三日 小郡にて

夕月やおもひはるけき穂麥原

同 四日 釜山にて二句

われも旅人擔軍の子すがる麗けし

朝霞ボブラは青き山の空

同 日 洛東江畔二句

大江の濁りカチ鴉かすみけり

幟見れば吾子らおもほゆ高麗の空

同 日 大邱附近二句

照り霞この赤土の踏むべしや

芽柳の水かぶる日も想ひ見つ

同 五日 勤政殿

石疊べんべん草の實になりて

同日 昌徳宮秘苑二句

殿作りいみじく春の惜しまるる

鶯の巢に梢枯れして松あはれ

同 六日 來青閣大會

水のなき川ばかりなる晝霞

同 七日 京城俱樂部大會二句

雨玉がとぶよ金魚の皆泳ぎ

梟の夢鳴き聞くよ暮の春

同 八日 仁川句會

千瀉遠く雲の光れる暮春かな

わが旅路藤のこぼるる夕べなり

同 九日 開城滿月臺途上

青麥や晝の砧を道すがら



同 夜 新幕句會二句

山の月雨なき麥を照らしけり  
赤い月赤い土麥は穂をぬける

同 十日 瑞興句會

照り砧水涸れの空にこだまして

同 日 信川温泉四句

喧嘩見てゐたり暮遅き旅の我  
挿しばらの香にいね足りし旅一夜  
夕蛙旅は淋しと誰がいへる  
ふるさとの空も晴れてか夜の蛙

同 十一日 樂浪にて

ふるさとの墓おもふ路のうばらなき

同 日 平壤牡丹臺

風かをる松の山路の暮永く

同 日 お牧の茶屋にて

ぼう丹にここな韓妓のあいそよく

同 十二日 鴨 綠 江

水も夏なる筏流しの唄あれな

同 日 奉天近く

大き原なりほちほち若葉木の暮るる

同 十三日 大石橋附近

朱門遠き柳の家の朝となる

同 日 大連見物

泥棒市のぼそぼそな木も若葉して

□



ここまで記して来た三日の夜半、慌しげな妹等の聲に筆を抛つて、父の枕頭に坐り直したま  
ま、時は四日に推し遷つて、その曉明七時といふに、父は、老いたる父は、うからやからに圍  
まれながら命の泉が全く涸れ果ててしまつたのである。ああ、その安らかなまごごはの眠り！  
明け早く流るる雲を追ふばかり

五日は葬儀の一しほに忙しく、永き日もいつしか暮れて、六日はお寺参りやら、略式の法要  
やらに暮れて戻れば、往く人に来る人に、夜更くるまでも身に心に暇もなく、七日といふ今  
日、静かな朝のしほしをまた筆を執つてこの稿を書きつづける。

同 十四日 旅順爾靈山

山頂やされし血汐に咲くたんぼ

同 日 東鶴冠山へ

鳥も啼かぬ夏の山路の松柏

同 十五日 湯崗子温泉三句

黄塵のかすみて暮るる行々子  
鶯や楡は黄砂をかぶりつつ  
よしきりや水の面に毛花吹きつけて

同 十六日 遼陽をよぎりて

白塔は柳隠れの旅なりし

同 日 奉天城

壁上の草青きのみ砂がすみ

同 日 同 北陵四句

古王廟泥雨の雀囀りて  
石象や石馬や今日の草若く  
松籟や雌雄の鵲馳逐して



同 十七日 撫順炭礦

炭ほりにたんぼばかりが花つけて

同 日 鐵嶺旅舎にて

囀りや草の毛花が舞ふ窓邊

同 十八日 同 龍首山

山査子の花に虫舞ふ旅の晝

同 日 同 泥棒市

人間の齒を賣つてゐる暖かに

同 日 同 市中

招牌に道陽炎のからみけり

——相つぐ弔問客に筆を擱く——

□

新居のいこなみも昨日で一こ形ついた。大工も尙も來ないこなるこ、心淋しくも思はれる。

木の香は嬉しいながらに、まださうもしつくりしない。ふさした目覺めには、旅寢の思ひがして、あたりが見廻されもする。豫算は超えても、褒められて見れば悪い氣持もせず、曾ては一塊の土すら持たない淋しさを思ひ入つた身の、今かうした己の家に幽棲のいのちを托し得る仕合せをしみじみ有り難いこにも思ふ。

それにつけても、亡き父が獨り佗しく家郷に在つて、腦溢血で倒れたその日（昭和三年五月念七）までも、そして七拾有二の額齡までも責務にいそしんだ其の汗の滴りが此の柱にも壁にも滲んでゐるこを思へば、今更に追憶の胸が塞がりもする。さういへば、今日は丁度五七日の忌辰である。朝鮮から歸つたあの夕べに「無事で歸られてよかつたね。」こ旅の私を氣遣つてくれた親心の深さが思ひ出される。滿鮮の旅行……父の永眠……中野の新居……かう考へて來るこ、私はそこに大きないのちのちからを感じずにはゐられない。さうだ、筆を執らう。筆を執らう。（七月八日）



五月十八日 奉天北塔二句

陰陽佛も見足りし旅のあたたかく  
集鴉の糞ふまじとす陽炎へり

同日 同 泥棒市

城壁の草の青みのあたたかく

同日 同 太清宮

日時計の西日となりてかげろへり

同日 同 二十日 京城途上

木々の育ちうれし山邊の夕蛙

同日 同 念一 開運寺へ二句

花松に地下將軍は鼻缺けな

巫女の舞山のさ蠅の湧きあがり

晝蛙むかしながらの草青く(延壽園)

同日 日 警務課分室

蛙鳴く夜の白松の月見てか

同日 同 念三 内金剛長安寺二句

妻を夢見し夏曉の山の雨(ホテル)

霧の漂ひ寺門に鳴ける山蛙

同日 同 日 明鏡臺

山鶯の聲巖の面の照りにけり

同日 同 日 温井嶺途上

鈴蘭とばかり雨衝く山の駕籠

同日 同 日 舊萬物相三句

霧の中峰頭空にきそひつつ

雨霧らふ山蔦にゆまり飛ばしけり

大山蓮華眞白しとのみ雨霧らふ



同 念 四 海 金 剛

からうつ木浪に吹かれて巖がしら

同 日 三日浦二句

石打つて鶴飛ばせけり青嵐

夢と浮ぶ峰がしらかも遠閑古

同 念 五 玉流溪連珠潭

駒鳥の聲水は常世に碧くして

同 日 九 龍 淵

瀧の聲つつじにかよふ蝶見たり

同 日 上 八 潭

天水のめかり蛙や巖炎えて

同 念 六 叢 石 亭

岩鳴の岩めぐり飛ぶ風青し

同 日 元山途上

玫瑰の路の蟹賣り晝永し

同 日 元山にて

この汐の通ふ出雲も霞むらむ

同 念 八 父危篤の飛電に接して

團扇ほしき思ひ身めぐり見廻しつ

同 念 九 洛東江畔

父おもふ夏曉の水ひろき

麥は熟れたり親鶏が子をつれて

同 日 釜山港頭にて

かちもちげも今を別れの夏霞

同 日 橋頭附近にて

葉櫻の水の日暮れを驢馬追へる



## 旅は満支へ

第一信——九月十六日（昭和十年）

同信各位。稲田原のあなた伊吹連山の霧のただよひ、まごころによき目覚めにて候ひき。

米原に停まるごころ半時、ゆくりなくも三田十寸穂君來り訪ひ、敦賀港頭まで送りくれ候。

埠頭に横はれる巨船——ご申候ても三千五百噸弱——これぞ二日二夜のいのちを托するさいべりや丸！ 頼母しくも覚え候。好晴、遠く白雲の浮べるのみ。記者團にかこまれつつ、その乞ふに任せて、

秋暑し今日を船路の雲遠く

秋暑き日にさらされつつ大毎記者のカメラの前に佇つごころしばし、鐘一路と共に自動車を驅つて、植山樓別荘に躬をやすめて朝食を兼ねての晝餐をこり、一時半再び埠頭に到り候ころ、測らざりき、京都の近藤雨齋方に旅泊中なりし郷里の老義兄の出迎へるに、驚き且喜べる次第に候。

三時に及びて出帆。次第に小さくなりゆく老義兄の顔！ 鐘一路の顔！ 雲の羽袖漸く伸びて、甲板を吹き去る潮風は冷やかに候ひき。

兄よ甥よ港の風の秋を吹く

船長遠山氏極めて懇懇、その厚遇、全く旅愁を忘れしめ候。

第二信——同 十七日

船中第一夜の眠りは熟せなかつたごころはいへ、日本海上の眼覚めは快よいものであつた。

夜來の曇りも次第に拭はれて、水天遠く小坊主雲が二つ三つ圓頂を覗かせてゐるばかり。

海の果て秋を峰なす雲白く

船長の話に——セントエルモの火は珍らしくない、三四度見たごころがありました、大概帆柱の天邊に。丁度雷火のやうに、ごころごころ。

以下、その一日のごころごころは、左の句々によつて御承知ありたい。

いるか飛ぶ秋を晴れたる潮路にて



船ゆれて來にけり秋の積亂雲  
秋風の波だち來ればうらがなし  
秋北風の高浪に日は落ち入りぬ

第三信——同 十八日

日出づるや港山さやかなるさへ  
心おのづから躍るを覺ゆる。

埠頭に沙人の姿を見出でたるうれしさ。肩を並べたるは上野哲夫にや。

大陸！—その北鮮の第一港たる清津に第一步を印す。

擔<sup>チ</sup>軍は老いたり港の朝の冷やけく

清津は鱒の港なり、年産額一千万圓に及ぶといふ。

秋を涼しく鱒船勢ひ出づるや

且すがし漁船見る見る出はらひぬ

沙人

國際ホテルに少憩。北鮮日報の一記者來つて句を望み、小影をもこむ。

高抹山上に、海を望み、巷を瞰む。

野菊はよかり山にぞ在す國津神

蜻蛉や色濃き海を眼な先に

沙人

自動車を飛ばして北鮮鐵道管理局に到り、講演一時間。再び車中の人となりて泉郷朱乙に向ふ。

沿道干鰯の匂ひに禁へず。輪城川の流域、ただ草茫茫々。

また暑し寄せ來るものは干鰯の香

オモニオモニ市場へ擔ふ梨子甜瓜

雁の陣みだれて道のはるかなり

羅南原頭、兵を練るに會す。思ひは遠く北滿國境に飛んで、ム弓を彷彿す。  
城見橋を越えて右方近く古刹の松籟を聴く。



薄暮、朱乙温泉千歳館に旅装を解く。川越對滿事務局次長の一行また來り投ず。

夕べ湯川の河原撫子濃きをこそ

溪嵐のそぞろ寒きをかちわたる

あまり湯の流れの櫻もみづりぬ

沙人  
同

半宵、妓の三絃律をなさず、謠また調はず、沙人今様を朗詠して陶然たり。左にその歌詞を録して、好漢沙人を識るの料とす。

平野二郎獄中作

ひとやのうちの日永さは

千とせの秋にまさるべし

ここは異なる神の世か

さらに命も伸びぬべし

もとより獄屋に住ふ身の

わびしといふも愚かなり

悲しといふも餘りあり

楽しといふてやみなまし

第四 信——同 十九日

涼々たる溪流の響き、今朝も快よく目覺め申候。

自動車快走、鏡城の古城門をあに、羅南・清津を経て一路羅津を指して北上いたし候。

山又山、しかも高からずして荒艸の離々たるのみ。

また草山の野菊ばかりをうきものに

國道修理の夫役の鮮人、三々五々、秋漸く深からんとして、日月長きの感あらしめ候。

バーンと一爆……驚くなかれ、我が乗る自動車のバンクせるにて候ひき。羅津なほ遠き池畔

の一小巷なりしも、招牌數四、爺媪彷徨、いよいよ以て日月長き北鮮の一情景に申すべく候。

途、羅津に近く、碧潮を湛へたる彎曲の妙趣、唯だその白沙にして青松なきを憾ましめ候。



羅津に建設事務所を訪ひ、沙人の知己馬渡氏の東道によりて滿鐵獨特と稱するケイソン工場を一見いたした候。這是岩壁に要するもの、一個萬圓、百個を要すといふ。以て羅津築港の規模の雄大さを想ふべく候。

コスモスのセメントまみれ海晴れて

ケイソンのどしりと据る秋の晴

沙人

羅津は素に軍事的・經濟的要港としてその築設に着手せるもの、來るべき十二年度に第一期の工事を終へたる時、果して豫期の成果を收むるや否やは、二ヶ月の後内地に歸來して相見るとの時をまたれ度候。

建ちゆくものの響き響きの秋天へ

港口・大草・小草の二島横はりて自然の防波堤を形成し、風光また佳なるもの有之候。

島二つ秋潮と眠りてひろき

雄基近くして軍馬補充部あり、そごろに近ける野艸獸醫正を憶ひ出で候。

時に、西北の山上雲漸く重く、忽ち白雨に襲はれたるは、旅上の一奇趣も申すべき乎。

夕立てる茅の穂ひたすら靡きけり

雄基に入らんとして洪水のあき歴々、落橋一・二、橋下に驟雨を避くる鮮人五・六、白衣は旅人の眼を奪ひ易きものに候。

まばら雨あれち野菊はみじろがで

沙人

博多屋旅館に寛ぎて、はじめて第一信の筆を執り候。敢て疎懶を問はざらんことを。旅は慌しく忙しきものにて候。

第五信——同——二十日

秋天いよいよ高し。

圖們の大江未だ見えずして、晚浦——周圍七里といふ——の展くるに會す。鴨群無數、水に眠るもの、水を蹴るもの、連なつて翔るもの、眼を心を欣ばしむるこそ多時。

汽車におどろく鴨におどろく旅人われ



鴨あるは飛んで秋日にきらめきつ 沙人

これより沼澤地帯、赤池を望んで白龍・黒龍の傳説を想ふ。  
圖們的流れ洋々たるも、唯だ是れ濁流、飲むべからず、濯ぐべからず。慶源前方更に架橋を  
奪うて渡るべからず。遠く琿春を指して河伯の暴威を思ふのみ。

濁り押す江畔柳散り初めつ

北つ國と思ふ稗の穂揃ひたる 沙人

訓戒に新橋成らんとし、黄波の河畔偶々奇岩を望む。

南陽に圖們と相對して、圖們的の一川濁り濁く滿鮮國境を劃す。一稅關吏密輸團の暴舉を語つ  
て憮然たり。

日すでに暮れんとして圖們に入り、かめや旅館に投ず。武智站長は沙人の心友、來り訪うて  
圖們的の過去を語り、現在を説き、更に將來を案ずるこゝに詳し。

圖們はこれ滿洲事變が生める入滿最初の據點、一見バラツク式トタン屋根の密集は、震禍の  
東京を懷はしめたるも、大厦漸く成りて、やや將來の殷盛を卜せしむ。武智站長語つて曰ふ

「當初小學兒童三十に滿たざりしもの、三年ならずして六百を算ふ。」こゝに。以て勃興の狀を知る  
に足らん乎。唯だ道路相通じて道路の狀をなさざるに艱む。

夢淺し明日おもふ夜の寒けくて

第六信——同念一

ここは滿洲目覺めの山の霧がかかる

今日の旅路は京圖線だ。匪！ 匪！ 匪！ 匪を忘れて、しかも尙ほ匪をおもふ。偉らさう  
なこゝをいつても人間は人間であるこゝが省みられる。

武装ものものしい警乗兵・守備兵合せて三十人ばかり、時を置いて列車内を往來してゐる。

山皆低く、雜木があつても茂らない。

雜草の秋を染めたるはいさしく、わけても野葡萄の紅、山紫苑の紫、女郎花の黄、た  
また粟畑の隈を彩る鶏頭、やや心の暢びやかさを覺えたのであるが、南溝に炭荷を見る  
に及んで、匪襲の山林地帯哈爾巴嶺近きを知つたのであつた。



ミ、いつでも遠く林帯を望むばかりで、素より何事もなく、またさう度々事のあらう筈もない。

敦化の町は相當に大きい。長谷部旅團激戦の地といふ木標が建ててあり、西方の丘山には砲臺の趾が存してゐる。温度八十二度、扇風機のスイッチを入れたことである。

威虎嶺附近からの落葉樹林の黄葉！ 紅葉！ なんぞ素晴らしいことか。それにあの眞白い脚々を揃へた白樺林！ 更に今まで滅多に眼に觸れなかつた穂芒の密生！ 全く土匪も馬賊もあつたものではない。若しあの樹林が車窓すれすれに濃い淡い彩葉の影を投げたら如何に魂澄むことであつたらうか。惜しいことに匪襲を避くる爲めに、五百メートル宛左右も伐り倒されて、焼かれた巨木がその骸をさらしてゐる。

匪をいふかこの山紅葉呀ゆるのみ

匪襲はばなど穂芒のなびけるに

匪や知るか脚を揃へし樺黄葉

匪に會へる話もなく秋の蠅

匪もとめて行く兵等よな草の秋

魂澄むや西日ひそかな山紅葉

西日ひらひら尾花の銀の舞はんとす

拉法耶馬ミ稱する大小の二奇峰も、金剛を知る眼には「あれがかい。」ミ微笑ましい位であつたが、それでも珍らしいミいはばいほう。

日は暮れた、驟雨がばらついて、遠く稻妻が走る。吉林はまだ見えない。

稻妻や吉林の燈のまだ見えす

野鴉は啼くこと知らず雨の秋

沙人

六時四十分、安武永吉縣公署參事官の出迎を受けて名古屋館に寛ぐ。ミはいへ寛ぐ暇もなく、舊知の俳句人楠部南崖君が来て、歓迎句會へ御出でを願ひたいこと。

句會は、吉林神社の社務所で、會衆二十人許り。小見を述べて、それから旅館へ。夜寒さが躬に迫る。



旅ごころ膳の茸におちつきぬ

沙人

第七信——同 念二

朝霧こめて、心やや昏きを覺え候。

霧がかかる黒煉瓦壁のもとの草

吉林第一の名勝北山に登り候、南崖君の東道によりて。玉皇廟・關帝廟・藥王廟・娘々廟等  
等張將軍の盛時を想はしめ候。

殊に楡の木の間を渡り鳴く四十雀、廟後の叢に晝を鳴くこほろぎは、まこめづらかにたの  
しきものに候ひき。こ申せば、市中處々に枝垂柳の大樹の見られ候こども、懐しき一つに御座  
候。

省城南方の小白山は清朝祖廟の存する所、鬱々こ黒く、北方の龍潭山は紅葉滿洲第一こは、  
南崖君の語るこころに候。

S字形をなして汪洋たる松花江は、舟筏の往來繁からざりしも、そぞろに心を潤うするもの

あり、江岸楊柳多からざるを憾みこするのみに候。

玉皇廟門に扁額して「天下第一江山」こ、或は然らん乎。

市中を巡り、江南に遊び、一笠の蕎麥に故山を偲びて、旅館に戻れば、山本吉林站長來り訪  
うて、代々木時代に於ける代々幡郵便局長の長男なりこのここに一鷺を喫し候。

午後四時十五分發新京に向ひ候。吉林所見を一括して左に。

霧ばれの楡山渡りして鳥は

ころころやひんがしの天は遠かり

玉皇のかんばせ秋日澄めりけり

娘々は顔のまろくて山の虫

秋風の流し筏も見ざりけり

榛子はみはみ江渡る風もなく晴れし

車中、中野吉林公署總務廳長こ語るここ少時、土們嶺も薄暮談笑の間に過ぎりて、滿洲の帝  
城新京に入りしは七時を過ぎて、ネオンの瞬きめまぐるしく覺え候。——名古屋館にて。



第八信——九月念三

午前十時雨到りて、そぞろ旅愁を覚えしめ候。

雨懸けて旅に柳の散るは憂き

時に、新京日々の記者來り訪うて曰く、前夜半、京圖線の黄松甸・二道河間に於て、新京發の列車に匪襲ありし。些かほつこ致し候。

折柄の時雨を衝いて、國都として新裝の成りつつある街の大厦高樓におそろきの腫をかがやかしながら戰跡南嶺に向ひ候。

時雨れては霽れては家の建ちそそる

秋時雨道坦々と野に消ゆる

沙人

南嶺は讀んで字の如くならず、單に南郊の丘埠に過ぎざるも、散在せる同胞の墓標の雨にそぼてるには、いたく心を打たれ候。

雨打てるこの草紅葉血ぬりけむ

歸途、滿蒙通して知らるる奥村氏を訪うて、過去、現在、將來にわたりての諸般の事どもを識り得たるは眞に仕合せに候ひし。

夕焼けつつ國都の空の雨霧らふ

旅館窓前の杏の一本が今しはらはら黄な葉を散らし候。

第九信——九月念四

好晴、新京を北するこま半時、行雁頻りに南す。

雁や南へ雲とどまらむ山もなし

粟豆梁々々々の旅路とて

蓼枯れ枯れ鶴は去にける天うつて

畑なして向日葵は實になりゆける

雁遠く梁の穂は野の高みより

沙人

向日葵は、敢て花を賞するにあらずして、その實を食はんが爲めに植うるのみ。また一奇



さすべきか。

松花江の南岸は、これ露人の避暑地、楊柳の間に數十の洋館點在して、やや眼を欣ばしむ。更にその北岸は一面の沼澤、漫々ミ碧水を湛へて、荻荻の間、小鴨・鳧の群棲せる、いよいよ心を躍らしむ。

晴れ晴れし菱採舟に鳩群れて

野しづかや水邊の秋は鷺よりぞ

沙人

ゆきゆきて哈爾濱驛頭に佇つ、その一點、玻璃の圓蓋をなせるもの、これ春畝伊藤公の難に遭へる處、當年を回想して感淺からず。

秋時雨はらと血にじむこの一點

北滿ホテルに投宿。薄暮荒草を踏んで沖・横川等志士の碑の原頭に佇つて、壯烈無双なるその最期を弔らひつつ、遠く遠く荒涼の地平線外に没せんとする落日を望んで感慨無量、心境全く解脱し了す。

秋日落つ荒魂かける曠野にて

雲の崩れうそ寒し曠野一線に

沙人

猥雜なる桃花巷、妖華なるキャバレー、夜風うなじに寒し。

旅遠く來て夜寒さの星に佇つ

夜寒しや楡吹く風を枕邊に

夜半の秋土娼に笑ひかけられつ

沙人

第十信——九月念五

好晴の秋日を踏んで、或は江岸に、或は八雜市を、或は極樂寺へ、或は博物館に脚をこぎめて、北滿唯一の國際的都市を一巡したのであつたが、往く處到る處、鋪裝の美事さ、流石に露人の雄圖を想はしむるに充分なるものがあつた。

梓の實垂れて秋光あまねかり

沙人

途上に會へる道教式葬列の異様さ、花火の疍癩玉にも似た放炮は些か耳を驚かしたこころである。



放炮に巷の秋の愛ひなし

八雑市は八幡の藪知らずにも似た雑品市場、雷魚・鰻魚も珍奇なもの。殊に大鯉のいづれも二貫目以上さいふに至つては、日本の鯉は小さい。

生き泳ぐ雷魚鰻魚に秋照りつ

秋暑く十斤の鯉桶にあり

沙人

夜、鐵路俱樂部で講演の後句會。

たまたま同所に於て、早稻田大學總長の田中穂積博士に會つて、温かい手を握り合ひ、お互ひの旅幸を祝ぎ交はしたのは、意外であるだけ嬉しいこゝでもあつた。

歸途、阿片窟（零賣所といつてゐる）の異様な情景に、一つ時夜寒さを忘れたこゝであつた。

吸うて阿片のねむくもなかり旅夜長

第十一信——同月念六

今日は濱北線の旅、好晴なるも、やや寒く候ひし。

朝寒く鳩首あげて汽車見てる

野の水は日に澄むものを蓼すがれ

沙人

松花江の鐵橋は、滿洲隨一の新式工事として滿鐵建設局自慢のものに聞き及び候。

支那式都市として古への匂ひ深しといふ呼蘭も、物資の集散地として活氣に満てりといふ綏化も、また例の叛將馬占山の根據地たりしといふ海倫も、唯だ車窓よりそれと眺めやり候のみ。沿道は視た眼にも豊饒に、沼澤處々、鴨も浮び、雉子も飛び、雀も紅葉れる叢にかまびすしく候ひし。

ここに於て白衣の民の稻刈るを

沙人

海北あたりより時に丘埠を見るのみ、一木の青きなく、荒涼かぎりなく候ひしも、楊家・李家より通北へかけて、小興安嶺のその裾のなだらかに延びたる高原地帯なるに及び、雜草まじりのちびたる雜木の紅葉もやや褪せて、ここらあたりは、既に冬の姿を思はしめ候も、盛夏には百合・あやめ・鈴蘭等々、さながらにお花畑を展開いたし候このこゝに候。



蜻蛉も北へここな國原果て知らず

丘の上の一樹は青く寒からず

紅葉るよ草に押されて檜柏

野の一樹尊きものに秋を晴れ

沙人

道はいよいよ北安近く、南より西へ見はるかす茫々たる宏淵の眺め！ そぞろに胸また潤きを覚えしめ候雄大の景観！ その際涯にほこりほこり頭を擡げたる二つの小山塊！ これぞ山なき北滿に山なす二克山にて候。

地の果てゆ草枯れ寄する二克山

胸ひらく思ひ枯れゆく草千里

沙人

久淵ト ム弓！ 北安驛頭に彼を見かけし我が瞳の如何にかがやき候こもぞ。

一度び北黒ホテルに投じて後、馬車を驅つて、創建日淺き北安神社に賽して、更に市中を一巡いたし候。ここは北邊の一軍都、悪路むしろ鬪闘に駕するもの有之候。

きつつきの影見せしのみ草枯るる

日暮れんとしてかすむ家々や冬

この宿にして、はじめてペーチカを見受け候。

第十二信——同月念七

好晴、早朝室内五十六度、室外は味爽零下三度、たまたま結氷を見たりこいふ。我が息おのづからに白し。

泰東近く、蒲の穂綿飛ぶこもしきりに、雉子の群また慌し。

子連れ雉子よな秋晴の豆畑へ

蒲の綿飛んで小孩ぼかんとす

枯れ原の日にそむき飛ぶ雉子なるか 沙人

泰安附近枯草一面に、雉子群いよいよしげく。寧年を出でて一帯の枯芦原を望む。  
まなさきに雉子こそ群るれ草は死へ



我に銃なし枯草蹴つて雉子の群  
枯芦を燃え貫き煙りあぐるのみ  
野に在らば草火な立てん秋の晴  
旅ごころむらだつ雉子に躍らしつ

沙人

齊々哈爾日の丸旅館に投ず。夜句會。

秋晴れを北指す兵の相つげり  
明日は南へ銀漢眉に迫るなり  
北吹いて野に灯もなかり天の川  
日に鳴くは四十雀かや楡黄葉

沙人

第十三信——九月念八

けふも好晴。

早朝几洲が来て、逝ける野艸のこみを語る。彼が病臥の直前、同信を以て相見て相語つたものは几洲一人であつたのだ。往いて句を語り、來つて句を談じて飽くを知らなかつたこのこ。この行、もし彼が丈夫であるたら……と思ふに、眼さきが昏くなつて來る。

總局の後藤君の案内で先づ龍沙公園へ、園裡悉く楡、中には黄葉を交へてゐるものもあつた。張作霖の運命をこもにした吳俊陞督軍の建てたさいふ丹碧の圖書館が眼をそそる。その望江樓に佇つて嫩江を見はるかしながら大洪水の光景を想ひ見る。

嫩江の溢れおもへば秋かすむ

自動車は巡り巡つて嫩江の大鐵橋へ、道側の洪水からおさろいて飛び立つ鶴三羽、浮寝の鴨は十數羽。

鶴もどす水の秋日を湛へたり

嫩江の水はやや澄んでゐる、沙人が網舟を流すによしこいふ。民船波止場さいふ胡蘆頭は水の涸れた處もあつた。

橋渡る時秋風の水かけろふ



宿に歸るに、咽喉が少し痛い、ム弓に藥を貰つて一寸横になる。その夜總局の人達に招かれた湖月の料理のそれこれ、就中醬の洗ひは一しほ舌に乗つたことである。

鰯の味北つ國の夜長くして

夜の十一時さいふに出發して四平街へ、さらばム弓、冀くは健在なれ。

第十四信——同月念九

野艸が臨終の地洮南も夢のうちに、目覺むれば荒涼かぎりなき曹達層の枯れ果てたるちび草のみに候ひき。

沙漠は見えね土の白きに草枯れて

やがて、右方に傳説の山玻璃山がむくりこ浮んで、蒙古を劃り候。赤禿げの小山塊、見る見る遠くかすみ去り候。

星一つ山となり秋をかすめる

鄭家屯にて几洲の妻子に會ひ申候、几洲はもこ豚飼、今窮通の活路をもこめて健闘しつつあ

り、切にその自愛を祈るものに候。このあたり復た蜻蛉の群るるを見る。

屋根土も白く蜻蛉の吹かれけり

二時四十分四平街着、驛前の植半旅館に入る。清水來り五味子來り、遽に心忙しきを感じ候。

少憩の後、一寒の東道によりて薄暮の市街を一巡、唯だ樹林もなく屋上もなく群れなす幾萬の晚鴉に驚きの眼をみはり候、特筆すべきはこれか。

千羽万羽の鴉の舞ひよ秋の暮

夜、滿鐵俱樂部にて句會、なかなか佳き句は獲られぬものに候。

暮煙ひく樹の間樹の間の秋深く

第十五信——同月三十日

半晴、今日ぞ七年振りに奉天へ、心おのづから躍る。車中ゆくりなく、大連より窓花・里道兄妹等の來り迎ふるに會す。開原以南の途上、漸く山を望み、樹を眺む。水田また多きを加へ



て、すでに秋收を終り、老嫗・小孩の穂拾ふを見る。

鐵嶺驛頭、芙蓉・草明・夕浪・綾南等あり、心ひそかに往年の一遊を憶ふ。

人間の齒をまだ賣るといふか秋

午後一時を過ぎて奉天着、久淵！斗史・句山・十街樓・素人・翠郷！

城壁の草咲く秋を旅上かな

その夜の公記飯店に於ける燕巢の味覺、艶樂書館に於ける沙人の劇歌の一節、こもにこれを記すべきのみ。

旅舎瀋陽館に戻れば、測らざりき、同宿の白水郎君來り訪ふ。

咳やや荒く、眠り淺し。

第十六信——十月一日

けふは、北大營から東陵見物といふに曇りである。

北大營は、いふまでもなく、滿洲事變の火蓋を切つたところ、營壁にはぶすぶす銃丸の痕が

残つてゐて、廢墟のやうに残骸をさらしてゐるところもある。無論感慨は淺くない。けれども、若し學良あたりが觀たら本當に無量の感に咽ぶだらう。

残つた兵舎には滿洲國軍が駐屯して、練兵場では閱兵式をやつてゐた。めぐらした白楊がた

またま青い葉を舞はせもする。

蝶々が虎杖林をぬけて消えた。

彈の痕その夜をまざと鳴く虫か

虫啼くよ胡沙運び來る風もなく

蝶白しあかざの枯れをぬけてなほ

清水

奉天郊外の、それも約四里を距つこいふ天柱山——そこに清の太祖愛親覺羅の東陵がある。

全山これ松山、颯々こ秋の譜を奏でてゐる。黄な山菊、紅い葡萄の葉、山裏紅の實は粒らである。

規模結構、別段北陵と變るころはないが、平地に構へられたそれよりも森嚴であり、幽邃である。長々の磴道を下つて往つた時この感が深かつた。疲れを思つて石象・石馬を見残した



こころを今更遺憾に思つてゐる。

壁上一さめぐりして苔の黄ばみに、その力づよい命を思ふ。紅墻が雜木を縫うて隠見したのも趣きが深い。

ピクニックの一团に近く晝餉のサルドウキツチを頬張る、残りを小孩らに頒つて起ち上るこゝ、運河が遠くうねつて光る。松籟はまこゝ躬に親しい。

古へゆ今も松吹く秋の風

いまを咲く蒲公英に啼いて虫老ゆる

陵壁に咲く山菊の黄はかなし

紅墻の草黄ばめるよ秋深く

公會堂で講演、夕餐後蓮華寺で句會。

だしぬけに後ろから「白田君」と呼ぶものがある、些か驚いて見返れば、思ひきや、同郷の舊友室賀鑑藏君であつた。——七年前は朝鮮の平壤で會つたが——老いてやや安らかなるを祝したい。

夜や秋の命あればぞ友老いて

第十七信——同月二日

半晴。斗史・清水・その他を訪問して同善堂に向ひ候。同善堂は清朝時代の創立に成るもの、孤兒・娼婦・老人・癡人の救済の爲めに設けられた支那には珍らしき慈善團に候。

呱呱泣き叫ぶ孤兒！ 呆々日向ぼこする老癡！ 心こむればおのづから涙をそそり候。

年寄り達に犬ころ草の枯れてけり

秋風は吹かな棄兒の眠れるに

夜、旗亭にて斗史の都々逸、驢馬の擬聲を聞けるを珍みすべきか。秋の夜は長く候。

第十八信——同月三日

曇。早朝發錦州へ。

稻の秋、萩の花、豆市場。



棉笑みて、羊群れなす。

柳河の流域、沙漠なして、折柄の朔風、天日を昏うす。

旅にして棉笑む風の北よりす

天日は昏し邈乎と草枯れて

北方に閩山の奇峭を愛つ。その山中睡ひそみ、その山下寺多し。

北風の閩山の雲のただならぬ

大凌河此處にまた濁りを流す。

錦州着、麒麟草父子健在。塔巷子また久潤を敘す。錦州ホテルに於てはじめて相見る者曰く

誰曰く誰。

錦水——錦縣八景の一——を渡つて、小嶺子の張作相別邸へ。

槐の垂れたる欣ばし。

邸裡の國立農事試験場、専ら棉花を培ふ。

槐なほ咲けり張氏の夢いかに

廢園の瓜紅の實を弾きなど

秋深き棉の仇花散りもやらす

壁の蔦土に這ひをりもみづりつ

犬ころ草は穂を光らせて葎なか

槐の實番犬瘦せて吠ゆにまかす

斗史

廣濟寺に、錦州の象徴たる喇嘛の古塔を仰ぐ。荒廢無憐、頭上を壓して將に崩れん。

日は西に古塔の草の枯れゆける

秋の日の昏し千里眼順風耳

句會・招宴、夜半に及ぶ。

第十九信——同月四日

今日は熱河へ、誂へ向きの好晴である。

麒麟草



早朝の八時、平泉への汽車に乗る。

里道兄妹は別れて大連へ、同行の天心も此處で引返す。

南嶺で足立靜堂の甥といふ錦州辦事處長の長三君に會つて、また北西へ。山又山の赭褐の色、碌々草も生えてゐない荒蕪の眺めは眼にも痛ましい。

小孩が其處でも此處でも群羊を遊ばせてゐる。

羊の群れの何をはむらん山の枯れ

それでも川があれば、家があり、柳があつて、蕪畑が菜畑が青い。

所在の驛站近く、愛路運動會といふものをやつてゐる。その標語に曰ふ。

一人愛路萬民享福。通報匪情愛路要訣。

粟や豆の風撰は、日本では見られない農民風景だ。

風撰の埃りをあげて日中天

鳳凰山一帶の山容は、流れに沿うて觀るに足るものがある。

柳も秋やそぎ立つ山のつらなりて

葉柏壽で須壽夫が下車、駐屯兵が貨物列車に宿營してゐる、そごろに同情の思ひが湧く。このあたり、あちこちに小松林を見かけて親しさかぎりない。

凌源から平泉までは、この一日に開通したのだといふ。

窓外に弦月の浮ぶを覗いてから、淡いながらに旅愁を感じる。

菜收むる親子に月の懸りけり

月に啼く驢よ荒涼の冬來り

平泉着は、寢間の深い八時過ぎ。脚をやすめたそのホテルも急造の支那家屋で、壁にランプがぼんやりと點つてゐた。宵星が降るやうで、庭先きの向日葵は夜目に白かつた。

ランプは壁に星河近きを思ひ寐る

第二十信——同月五日

驢馬の奇聲に目覺め候ひしが、頭も心も今朝は澄徹、時に寒さをすら覺え候。

驢が啼いて朝寒き風の枕に